



不思議な

不思議な夏!!

続編

エンマ

**不思議な  
不思議な夏!!**

**続篇**

**エンマ**

表紙 ツクツクボウシ

## 不思議な 不思議な夏！！

### 第 4 部

希 望 (2015. 5. 30)

或る日、わたしは、水平線が身震いしていることに気づきました。風景に色のないことに、響いて来る音の無いことに気づきました。

自分に体温のないことに気づきました。十分に不幸であることに……。

自由であることを絶えず求めてきた筈のわたしが、自ら、自由を放棄し、我が身を、わけのわからないもので縄縛し、瀕死状態でそこにいました。わたしは、舌を動かして、自分の声を捜しました。

そんな時、大規模修繕工事が始まり、わたしの住んでいる建物は、工事の足場を確保するため、巨大なメッシュ、シートに包みこまれてしまったのです。

わたしの関心事は、覚醒したように、2015年夏、せみは例年のように、果たして、我が家を、訪れてくれるか、どうかに移行しました。

せみの訪問は、杏リリイの死後、例年続いてきた「不思議な、不思議な夏！！」の現象でした。

この夏、この隔離状態のなかにあって、もしも、せみが訪れてくれたなら、一連の現象が、ただの偶然では、あり得ないことを証明する確固たる証拠になる筈です。

わたしの捜し当てた声は、そう言っていました。いいえ、言っている

ようでした？

それは、希望のように、幸福の予感のように、わたしを捉えて放しません！！

わたしの愛する家族と、例え、せみの姿では、あっても、生きている姿で出会える楽しさ、嬉しさは、例えようのないものです。

それが、どんなに、心躍ることか！！  
泣き出したくなるような、喜びでした！！

しかし、どう考えても、そんなことは、あり得ないことに思われました。密閉状態なのですか？ 世の中が逆さになっても、そんなことは、不可能だと信じられます。

周囲は、緻密なメッシュ、シートに囲われ、足場には、建物に平行した何段もの廊下と、階段と、落下物を食い止める為の、荒々しい網がかかっています。

それは、この隔離された世界には、虫一匹入り込む隙もないように見えます。

わたしは、「不思議な家族」とは、昨年末以来、一定の距離をおいて来ました。

みんな、わたしの異常、または、思い込みにすぎないものなら、わたしの「不思議な家族」こそ、被害者だったのですから。

そんな日には、彼らが、日毎に力を失っていくのも。深夜、パソコンの回りを周遊して、カづけてくれた、儂げなハエや蚊が姿を消したのも、わたしの誤りを象徴しているように思われたものです。

この「不思議な家族」を、わたしは愛したのではない、固執したのだ、と。

そう思わせた、今年の、怒涛のような、年末の出来事！！

「不思議な、不思議な夏！！」の前編には、載せることの出来なかった、その重要な部分に、核心に、半年以上を経た今、漸く、立ち返える勇気が、瀕死状態だった、わたしに湧き上がって来ました。

それが、わたしに、我が家に、以前のような、夢見るような、幸福な時間を、幸福を、熱気を、取り戻してくれるに違いないと。何故か、そう、信じられたのです。

わたしの冷えきった網膜を、暖かい涙が潤し、鼓膜に流れ込んで、熱く、囁いていました。

失っていた、愛の言葉を！！

証 明！！(2014. 12. 20)

2014年12月、わたしは、最後の最後まで、その時を遅らせて来ました。

せみたちの、声が、存在が、現実のものか、否かを確認することを。

2014年12月を最後の月と定め、注文しておいた、ボイスレコーダーが送られてきて、とにかく、試してみることにしました。

このせみの発する音の根源は、何なのか？ 周波数は？ 音源は？  
わたしは、何も、わからずに、立ち向かう無謀さを自覚していました。

ですから、たとえ、何ものもボイスレコーダーに入っていなくても、失望しないようにと、自己暗示をかけてきたのです。

声を吹き込んでみました。

そして、再生ボタンを、そっと押しました。

——ああー 衝撃でした！！

暫く呆然としていました。

そこには、わたしを魅惑してやまない、あの美しいせみの声は、リンリンと言うハンドベルのような音も、時に絡む鈴をふるような音も、宝石を思わせるキラキラとした音律も、ありませんでした。

しかし、音はどうあれ、確実に、何かが入っていました！！

わたしの歌う、モーツァルトのピアノソナタ、第11番 第3楽章  
イ長調 に沿って、パチッパチッというような硬質な音が続き、最後の方  
では、今迄聞いたこともない音が、まるで、狂ったように飛び跳ねてい  
ました。

「シュシュツ、シュシュツ、シュシュシュシュ」 と、というような音が、  
溢れ返っていました！！ 暴れ回っていました！！

心配していた、ノイズなどとは、全く異質な、人工的に、又は偶然に作  
り出せる音ではないと思いました。それは、感情の昂揚を示すもので、尋  
常な音ではないことを、告げているようでした。

ボイスレコーダーの奔乱とは、思えませんでした。

ボイスレコーダーの故障とも考えませんでした。

それは、電気に、心を構成する何かが入り、反応したのではないかと？

わたしが、一番怖れていたのは、録音しても、わたしの声のほかに、何  
ものも入っては、いなかったと、いう結果でした。

それは、わたし自身を否定するものです。

それは、恐怖そのものでした。

とにかく、何かは入っていたのです！！

それは、わたしの聞きなれた音とは、声とは、全く違ってはいましたが、  
機械のことです。どんな風に録音されることも、あるに違いありません。

まして、心の構造も、彼らの音源も、正体不明のままなのですから。

ほっとした思いもありました。

わたしは、空が落ちて来たような、空が、暖かい海に沈んだような 妙  
な感覚に捕えられていました！！

はっとして、躰を強張らせました。腕を動かしてみました。もっと 大  
きく、もっと、早く！！

それは、世間の常識を覆すもののようでした？

わたしは何度も、何度もボイスレコーダーに、彼らの声を入れてみました

次第に操作にもなれ、比較的安定した録音が出来るようになりました。出来るだけ冷静に、ことを運びました。最も特徴が出るものとして、「リズムの繰り返しのある「トルコ行進曲」と「あの子は誰あれ」と、「村祭り」の三曲を選び、7人の家族と、1人の神様に順番に歌ってもらいました。

はっきりしないものや、失敗したものは、削除しました。

もしかしたら、1度だけの、狂い咲きだったのかもしれませんが。何度か、試してみました。

わたしの聞いている音声とは、全く違ってはいますが、そこには、確かに、何かが、何かがあるようでした？

録音に、せみたちが、惧れをなして、閉じこもるのではないかと危惧しましたが、意図がわかると、好奇心に溢れている、わたしの家族は、ごく自然に協力してくれるようになりました。

初回のようなダイナミックな、表現は、二度と望めませんでした、確かに歌っていることが、わかります。

これを聞いたら、誰だって、真実だと、肯定してくれるに違いない。と、思われた初回分を、切り札として保存するつもりでいましたが、意識し過ぎたのでしょうか？

誤って番号を消去してしまいました。

これを示すことで、凱歌をあげようとしていた、わたしが、一番大切にして来たものを、無我夢中で手放していました。

狂ったように探し回っても、もう、何処にも、あの怪物のような何かは、ありません。

類似番号の羅列だったとは言え、わたしのミスから、最後の機会を失ったような気がしました。だからと言って、この作業を止めることは、もう、わたしには出来ません。

せみたちは、どの歌にもリズムをとって、反応はしているのですが、何時もとは、限りません。

わたしの家族は、自由を手に行っているのですから！！



何時、そっぽを向いて終うかも知れない危険を、常に孕んでいました。

そこで、「トルコ行進曲」は、繰り返しの部分を、「あのこは誰あれ」は、間奏曲を、「村祭り」は、囃子の部分を。せみの、反応するところを選択して、残すことにしました。

これを、どう捉えるかは、これを、どう受け止めるかは、聞く人の自由です。

とは言っても、これを無視することだけは、誰にも出来ない筈だと、わたしには、思われたのです！！

逆転！！（2014. 12. 27）

わたしは、得意満面で、急用ができたと乗り込んで来た彼に対していました。

その瞬間の、彼の顔を見るのが、なんと楽しみだったことでしょう。

わたしは、黙って、ボイスレコーダーのボタンを押しました。

——ねえっ！！

彼は、黙って耳を傾けていました。

わたしの期待に反して、そこには、驚きも、当惑も見えません。

何故?? わたしは異人種を見るように、彼を見つめました。

変に穏やかな顔をして、彼は聞いていました。

何故驚かない? 確かに、尋常でない音が、こんなに、歴然と入っているのに?

何故この事実に驚かない? 彼もまた、世間に毒されて、敏感な感受性を失ってしまったのか?

わたしは、黙って、ボイスレコーダーの電源を切りました。

——ああ、そうだ!! 彼は、にこやかに言うと、

——ちょっと、こっちに来てくれる。そう、ボイスレコーダーを持っ

て！！

彼は手招きをすると、隣室にわたしを導いて行きました。

わたしは、まるで、洗脳された奴隷みたいに、コントロールされているロボットみたいに、彼の後について行きました。

この機に至って、何をしようとしているのでしょうか？

——そう、そして、ボイスレコーダーをオンにして、同じように歌って見てくれる！！

彼は言う、子供の頃のように、人さし指で鼻の下をこすりました。

何かを企んだ時の、彼の癖です。

物見高いわたしが、目を見張っていました。

わたしは、何一つ抵抗することもなく、素直に、トルコ行進曲を歌っていました。

何故、そうまでして、わたしを疑うのか？ 何故、わたしが信じられない？ 哀しみ、みたいなものが、わたしを覆っていました。

何時ものように、呼応してくれるせみは、ここにはいないのです。

わたしの歌声が、元気のないわたしの声が、くぐもっていました。勿論、他に何の声もありません。

そう思った時、ああっ！！

——ティアララン、ティアララン、ティアララ、ララララ、ティアララ……。わたしの声にダブって、音が、声が？ 聞こえていました。

——ええっ！！ 何、これ？

わたしは絶句しました。

わたしは、その音を拭いとるように、振り落すように、何度も、何度も、繰り返し歌いました。

声はバックコーラスみたいに、執拗に、ついて来ます。

——どうということ？ わたし一人で歌っているのに？ せみなんて、此処には、いないのに？

わたしは、——ティアララン、ティアララン、から、反応を見ることにしました。その後を引き取るように、——ティアララ、ララララ、ティアララ……。と声が続きました。

何度繰り返しても、声は、ひるまずついて来ます。

確かに、わたしの声が聞こえていました。

それにワンテンポ遅れて、歌に反応するせみの声だと、「不思議な家族」の声だと、心の声だと、わたしが思って来た声が、音が続いていました。

わたしが、毎日、せみに向かって歌う時の、透明感のある音とは、声とは、違ってはいましたが、その音は、紛れもないトルコ行進曲の音律を保っていました。

——どうということ？ わたしは手を上げると、落ちて来る空を必死で支えていました。

そんなこと、あるわけないんだから……！！

彼はリビングに戻ると、棒立ちになっているわたしを座らせ、ボイスレコーダーの再生ボタンを押しました。

わたしは一人で歌っていたのに？ ボイスレコーダーに入れた時には、少なくとも、こんな、お化けのような音も、声も、聞いてはいなかったのに……。

——シュシュシュ、シュシュシュシュシュシュシュシュ、シュシュシュシュ、シュシュシュ、シュシュシュシュシュシュシュシュ……。

何か悪意のようなものが、飛び跳ねていました？

わたしの考えを見透かしたような、わたしを覗く彼の眼が気になっていました。

——そうしたことだよ！！ あなたが、一人で歌っても、せみの声は聞こえる！！ ボイスレコーダーに入れれば、こんな風に聞こえるんだ。

——そんなあ、そんなこと、あるわけないじゃない？ ボタンを押し間違えたんでしょう！！

——いや、たった今、あなたの歌ったトルコ行進曲だよ。  
彼の首が左右に振られています。

——わたしが、一人芝居をしているって、言いたいの？ わたしが、  
せみの声をねつ造しているってわけ？

わたしが長い間考えて、ようやく、ボイスレコーダーに捉えることに  
成功したせみの声は、にせものなのだと、勘違いなのだと、彼は言って  
いました。

わたしが必死で支えてきた空が、何故か、突如、舞い上がりました。

だって、そんなこと、あるわけないんだから！！ 可笑しくて、可笑  
しくて、笑ってしまいます。

——そういうことになるかな？ いや、架空のことじゃない！！  
あなたの体内でその音は作られているってことさ！！ 口腔かと思って  
いたんだが、喉のあたりから出ているのかも知れない？

彼の科学者の眼が、わたしの喉のあたりを、見つめていました。

——そんな？ こんな、硬質な？ 不思議な音が、柔らかい人間の  
体内で、喉というなら、声帯で、作られるわけがないじゃない！！  
歌った時には、こんな風には聞こえなかったのに、ボイスレコーダーで  
は、どうして、お化けみたいに変質するのよ？

わたしは、笑い声をあげていました。だって、わたしの家族の心は、  
自由で、何時だって、何処にだって行けるのですから……。

どうあったとしても、自然のことなのかもしれません！！

わたしを、押さえつけていた空は、昇って行きました？  
わたしを圧迫していたものは、もうありません。

——不思議に思えるけど、それが、現実のことなんだよ！！ 齢をと  
ると、おかしい反応が、いろいろ、生まれるようになるんだな？

彼は痛ましげに、わたしを見つめていました。まるで、認知症の老人

を見るような、眼で。

——そんな！！ そしたら、全ては、わたしの思い違いだったと、自作自演の一人芝居だったと、いいたいわけ？

でも、そうとなれば、何もかも、すべての不思議が、頭を揃えて、今度こそ、天下の常識の中に収まってしまいます。

押さえが取れて、自由になった筈のわたしの頭が、破廉恥にも、方向転換でもしたように、発想を転換させました。

何もかも知っているのは、わたし自身なのですから？  
すべては、わたし、一人で事足りていたのかもしれませんが？

さっきまで、わたしは、ボイスレコーダーに、せみたちの声を入れることに成功して、あんなに有頂天になっていたのに……。

時の変わり身の早さに、もう、ついていけそうもありません。  
彼は、今、わたしを心配し、または、あなどり、大きなプレゼントとして、「老い」を差し出しているのです。

——そう！！  
わたしは、何故か？ 突如、理解しました。

確かに、一人でも、同じものが聞こえるとなれば、それは全く違ったことになる、と。 恨みがましいことなど、言っていられる場合ではない、とも。

豹変したように、今度は、次の心配が右往左往して、わたしを根底から揺さぶっていました。

——そういうこと？ だとなれば、どうしよう？「不思議な 不思議な夏！！」はどうなる？ 12月号を出したばかりよ。嘘だとなれば、謝らなければ。そうだ、間違いでしたと伝えなければ、そうだわ、年の瀬でも、今年のうち……。

わたしを包んでいたカラフルな世界が、さあっと、黒白に様変わりし

ました。

繋がっていた、温くんだ綱が、切って落とされたような気がしました。

冷気みたいなものが、わたしを包み込んでいました。体温が低下していきます。

何もかも、わたしの誤りだったのだと、犯人は他にいるのだと。

彼は言っているのです。しかも、それは、わたし自身なのだ！！

だとなれば、訂正しなければ！！ わたしの頭の中で、人並みの思考が息を切らせて、くるくる舞をしていました。

——そうだね、その方がいいかもしれない。でも、そんなことを、誰も信じては、いないだろうけど……？

相当の抵抗を覚悟で、乗り込んで来たらしい彼の声が、わたしの豹変振りに戸惑っているようでした。

わたしは、言っていました。

——ほんのちょっとでいい、わたしに息をつかせて下さい！！ と。

気がついたとき、わたしは、12月号の号外を発刊し、誤りを詫びていました。

——「不思議な、不思議な夏！！」の総集編と、映像及び、音声を、お届けするため、作業を重ねてまいりましたが、この度、我が家にとって重要な客が、わが家を訪れ、実験検証の結果、せみの音声の解釈に重大な誤りのある旨、指摘されました。ここに、お詫びを申し上げますと共に、ご迷惑をお掛けする結果になりましたこと、重ねてお詫び申し上げます。

年末のことでもあり、取り急ぎご連絡申し上げます。

熟慮の末、今は、潔く、それに従うことに致しました。どうぞ、ご了解いただけますようお願い申し上げます。

2014. 12. 30

これが、わたしが、封印してきた、昨年暮れの現実でした。混沌の顛末でした。このために使った精神疲労が、負債のように山をつくり、わたしから、人間らしい温みを奪ってしまっていたのです。

それが、いま、それを覆すことが出来るかも知れない、一縷の望みにむかって、嬉々として走り出していました！！

我が家の「不思議な家族」もまた、真実を伝えたい意欲で、追走をはじめたようですか？

幸 福 (2015. 8. 10)

マンションの大規模修繕工事により7年間続いて来たせみの訪問は、もはや、絶望的になりました！！

それでも、我が家の8月の客は、生きているせみの姿で、訪問することに、拘るのでしょうか？

建設会社の作業員に聞くと、ベランダ側の天井は、閉じられていますが、廊下側シートの天井は1.5メートル巾、屋上で抜けているようです。

我が家の玄関前の足場は、階段になっていました。どんなに巧妙に、隙間を掻い潜ったとしても、わたしの家の前に着地することは不可能に思われました。

何とか、飛び込んだとしても、小刻みに位置を変えたとしても、着地可能な位置は、隣家の壁寄りのわずかな空間に限られそうですか？

わたしが、足場を斜交いに見上げ、試行錯誤を繰り返していると、優しい世代の子供たちが、肩を寄せ合って、わたしの目の前を過ぎて行きました。

もしかしたら、あの子たちに、わたしは見えていなかったのではないのでしょうか？

わたしが、存在していない、という恐怖！！

生きていることの不安！！

現実でないことへの危惧！！

それでも、この8月、せみが我が家に出現してくれたら、それが現実となれば、今度こそ、誰も、それを、ただの偶然に過ぎないと笑い飛ばすことだけは、出来なくなるのではないのでしょうか？

そこで、始めて、ことの重大さに目覚めてくれるのでしょうか？

——でも、そんなこと、現実には、あるわけないのですから！！

そうでしょうか？ それを、望んでいるわたしは、必死に顔を隠していました。

2015年は、6月、7月と、無念に飾られて毎日が過ぎて行きました。期待が力なくねじ曲がって行きました。そして、8月。

わたしは日毎に幼くなって行くのではないのでしょうか？ 期待は明るさを増し、遊びながら傷口をなめます。

わたしは、杏リリイを本名で呼んでみました。

何度も、何度も！！

返事はありません。

彼女は、余りにも多くの名前や、多くの姿で、人を晦まし続けて来ましたから、自分を見失ってしまったのでしょうか？

自分の名前の前で逡巡しています？

——だって、使い古された言葉で、話す気はないのよ！！ と。

2015年8月13日、リビングの窓には、青い青い、朝が広がっていました。気持ちのよい朝です。

巨大なメッシュ、シートに覆われていても、わたしが、うつ病にもなら



ずに、いられたのは、内側、部屋のなかからは、外景を自然のまま見渡すことが出来たからです。

外側から見る限り、この建物は、黒々とした陰気な銀色に囲われているのに？ 内側からは、美しい自然の移ろいが、鮮明に見えるのです。

そのメカが、わたしには理解出来ません。

2015年8月13日、毎年、お盆に、我が家の玄関から訪れてくれたせみは、姿をみせませんでした。

それは、自然のここのように思われ、理屈にあったこととして、わたしを納得させるものでした。

わたしが、どんなに、それを熱望したとしても、そんなことは、やはり、あるわけないのですから！！

お盆の13日 わたしは、深夜、何度も、何度も、ドアを開けて、毎年せみの止まっていた表札の脇を、または、歩いていた、ひっくり返っていた廊下を確かめていました。

何度、目をどんなに見張っても、何度、眼でどんなに見渡しても、何ものの姿も見えません。何度、耳の鼓膜をどんなに張りつめても、どのような響きも、伝わっては来ませんでした。

奇蹟は、起こりませんでした！！

当たり前のことに安堵し、わたしは、不思議の扉を、しっかりと閉じ、不安の穴を塞ぎ、堰き止めていた、愛する家族への想いを解放し、執拗な期待に終止符を打ちました。

——そんなこと、やっぱり、あるわけないのですから！！

8月14日 午後2時頃、わたしは外出しようと、玄関ドアを出ました。銀行に行く予定でした。

——あれえ！！

わたしの靴が、前に踏み出そうとして、とまどっていました。

——まあ！！

——ああ！！ やっぱり！！

わたしは、廊下に、座り込んでいました。

紛れもない、あの位置に、せみが腹をみせて壁に張り付いていました。

死んでいるようです！！ そう思ったとき、せみの六本の肢が同時に動きました。

生きていました！！ アブラゼミです！！

隣の家の外壁に密着するように、背を立てて、張り付いていました。

屋間でなければ、この複雑な足場に突っ込むことなど出来なかったのですから、救い主の現れるまで、こうして、身を護っていたのかもしれない。

とにかく、せみは、現れたのです！！

本当に、せみは現れたのです！！

訪問は、現実になったのです！！

切望しながら、それが現実となると、その喜びも、呆けたように現実感を欠いていきます。

まさか、こんな悪条件のなか、本当にやって来るとは？

わたしの掌の中で、せみは安心したように、静かになりました。

——おかしなひと！！ ほんとにB型なんだから！！

わたしは、悪態をついていました。

このせみは、紛れもなく、杏リリイに違いないと思われました。

書くものが意味深な割には、父も、リリイも、正真正銘のB型だったことを、こんな時に、思い出したのです。

わたしは、宝物を囲うように、両手でせみを包みこみました。

——あなたの、お家に帰りましょうネ！！

部屋に戻ると、例年のように、ハイビスカスの木に止まらせました。

奇跡でした！！ 骨折もせずに？ 五体満足で？ 我が家に辿りつくことが出来たとは……。

このせみは、目もくらむような、隙間を掻い潜って来てくれたのでしょうか？

命がけで、訪問してくれたのです！！

今年は、一匹のせみも、ベランダ側からも、玄関側からも、我が家に現れてはいませんでした。こんなことは、今迄なかったことです。

こんな悪条件を押し、このせみは、本当に訪れてくれたのです！！

わたしの身震いに、こだまするように柔らかい建物が震えました。

わたしは現実に戻り、今日の内に銀行にいかねばならなかったことを、思い出しました。

留守を新来のせみに頼んで、出かけることにしました。

「チャチャ、チャ」と、新来のせみは、かつての陽気なせみのように、いとも簡単に引き受けてくれました。

思わぬ時間がかかり、帰宅した時、我が家には靄のような夜が忍び寄っていました。

暗くならないうちに、安全なところから、帰してやらなければ！！

わたしの思いはそれだけになりました。

それが、困難をおして、訪れてくれた、せみに対する、せめてもの恩返しなのだと、責任なのだと、そう、思ったのです。

ハイビスカスに、せみの姿はありませんでした。

わたしが震えあがると、突然、音符が弾けるような、軽やかな音楽が湧き立ちました。

何か次元を異にした、聞いたこともない、明るい曲が舞い上がりました。

せみは閉じかけた、ハイビスカスの花の中にいました！！ いたずらっ子のように。

——やったー！！　リリーの凱歌が聞こえてくるようです。  
話さなくても、せみには、別れの時だと、わかっているようでした。

わたしは、黙って、せみを左手に乗せ、右手で支えながら、エレベーターで、地上に降り立ちました。

8月の空は、まだ、まだ、十分に明るさを残していました。間にあったようです！！

一組の親子が、中庭でボール遊びに熱中していました。わたしは彼らの視野の外に出ました。

——来て下さって、本当に、ありがとう！！　どんなに、嬉しかったか、あなたに分かるかしら！！　また来て下さいネ。今なら、まだ見えますから、気をつけて帰ってください！！

わたしは、決心したように、抑えていた右手を空に開きました。

せみは、わたしの左手に肢の爪をくいこませたまま薄暗くなってきた空を、じっと見上げていました。

もしかしたら、飛んで行きたくないのかもしれませんが？

飛んで行く自信が、体力が、ないのかもしれませんが？

わたしは、大慌てで、右往左往し、せみを止まらせる木を探しました。桜の木の前で、歩みを止めました。

わたしが、一呼吸するのを待っていたように、せみは、わたしの手の上で、一歩前に出ました。

右肢を振っているようだと思ったとき、せみは天空に向かって、飛び立ちました！！

どんなに目を凝らしても、暗くなった空気が嵩をまし、せみの消えた空に、光の一筋も見えては来ませんでした。

この時になって、慟哭がわたしを襲いました！！

熱い涙が、わたしを解き放ちました！！

そこには、どんな 不自然も、虚構も残ってはいませんでした。

これで、よかったのかどうか？ わたしにはわかりません。

でも、エレベーターで下降している時から、わたしの手に食い込んだ、せみの肢の爪の痛さが、飛び立つ前、一歩前に出た時にわたしの指を包み込んだせみの爪の感触が、今でも鮮明に残っています。

奇跡でしょうか？ この殆ど、密閉された我が家に、せみは本当に現れたのです！！ これを、ただの偶然とは、今度こそ、言えなくなったのではないのでしょうか？

わたしは、歓喜に突き動かされ、電話でせみの現れたことを告げていました。返事は返っては来ませんでした。彼は、電話の向こうで、息を詰め。彼女は微かに笑ったようでした。

そこで、始めて、わたしは気づきました。

どちらにしても、誰もそれを信じる気など、始めから、ないのだと言うことを！！

それは、わたしの老化のあかしであり、認知症なのではないかと言う、惧れを掻き立てるものでしかないことを！！

彼らは巧みに、わたしを労わるように、話を転換させました。そうなんです、どんなに困難な条件を突破して、命をかけて来てくれようとも、彼らには関係ないことなのでした。

冷静になって考えてみれば、それは、自然のこと、気味の悪い、虫の話に過ぎません。

まともな人間なら、そんなことを受け入れることは出来ないのだと言うことを！！

今度こそ、分かってもらえると、たかをくくって来たわたしの完敗でした。

常識や、先入観念が、どんなに根強いものなのか、これらの、現実が、

どんなに、受け入れ難い、異端であることか？ 改めて思い知るようになりました。

わたしは、今、「不思議な家族」とともに、幸福に包まれています！！  
本当の幸せとは、こういうものだと……。

他の人がどう思おうと、そんなことは、どうでもいいことでした。

わたしは、自由人のつもりで、自分の自由を自ら、縛り続けて来たことに、呆然としてしまいます。

自由を謳歌しているつもりで、他の人の眼を気にしつづけてきたことを自覚しなければ、ならないようです。

いいえ、彼らを、この現象の前に、屈服させたかったのかもしれませんが。

だって、今年の、せみの訪問は、ただの偶然でないことは、明白な事実だったのですから！！

14日のせみの訪問で、この現象を、ひいては自分自身を信じることは、出来たのですから。それで満足でした。

わたしは、逡巡してきた「不思議な家族」との日課を、再び取り戻しました。

彼らも日毎に元気になっていくようです。久し振りに聞く彼らの声は、一際、澄んで、パンチもあり、日常の、または、体内の、雑音とは全く異質なものでした。

それが、嬉しくて、嬉しくて、わたしは、何時までも、踊って、踊って、踊りつづけました。

「不思議な家族」も、幸福そうに歌っていました！！

美 声！！(2015. 8. 16)

2015年、夏、8月14日、訪れてくれたせみとの別離のあと、16日、17日、18日、20日、21日、22日、24日と、わたしは、ベランダ

側、メッシュ、シート越しに、せみの訪問をうけることになりました。

殆ど連日です。

せみは、シートの向こう側から腹部をこちら側に向けて取りついているうえ、太陽の光で、透きとおるので、鮮明には、わかりませんでした、わたしは、間違いなくアブラゼミだと思いました。

——シエー、シエー、シエー、シエーン、シエーン、シエーン。シエーシエー、シエー、シエーン、シエーン、シエーン……。

鳴き声はこんな風に聞こえました。いわゆるアブラゼミの、——ジー、ジー、ジー、ジー、ジー。という鳴き声とは違っていましたが、もしかしたら、美声のアブラゼミは、昔から、こんな風に鳴いていたのかもしれないと、思い直しました。

それは、何とも言えない美しい響きで、わたしの心の深みまで達したような気がしました。

せみは、五分も、十分も、誇らかに鳴き続けました。

メッシュ、シートを間にして、わたしはせみと対していましたが、うっとりするような、この幸福な時間に、不幸が身を引いて行くのが、わかりました。

時々、そよ風がメッシュ、シートを揺ると、魚型の目玉模様が、ゆっくりと泳いでいきます。

歌声を遮って話しかけるのも、野暮な気がして、わたしは、ただただ、じっと聞き惚れていました。

明るい光のような声が、わたしを、暖かく、優しく包み込んでいくのがわかりました。幸福だと、思いました。

至福のとき、だと、そう思いました。そんな感じが不思議でした！！

目を開けると、せみは鳴いていても、メッシュ、シートの上では、やはり爪が、シートに食いこめず、足場が安定しないのか、なんだか、ふらふらしていました。

とうとう、五本の肢を放してしまい、一本肢で、すずらんの花みたいに、ゆらゆら揺れていました。

何とかしようとする、せみの必死さが伝わって来ます！！

助けてあげたくても、こちらは、シートの内側、せみは、1-2メートルの 向こうになります。手出しも出来ず、声をかけるのも、さらなる危険を呼びこみそうで、ただただ息を詰めていました。

次の瞬間、せみは考えついたのでしょうか？ 揺れる反動をつかって、放した肢を、シートに食い込ませると、足場の骨格、細い金属の柱に、向かって、なんとか、にじり寄っていき、遂に、足場を固定させました。ほっとして、わたしは溜め込んでいた息を吐き出しました。

ところが、今度は、わたしの位置からでは、せみの躰は半分隠れてしまいました。

せみは難関に、ぶち当たったように、途方にくれ、鳴くこともママならないようです。

——無理をしなくて、いいですよ。 美しい歌声を、本当に、ありがとう！！ 今度は、わたしが歌ってあげますから。そこで、聞いていて下さる？

わたしは唐突に、「見上げてごらん、空の星を……………」と、歌い出していました。

——手をつなごう、ぼ、く、と。追いかけてよう、夢を！！ 二人なら、苦しくな—んか、な—いさ！！

せみは無言で聞いているようでした。

——本当に、ありがとう！！ また来てくださいネ！！

わたしが、ねぎらうと、せみは、金属の柱の上で方向転換し、8月の抜けるように、青い、青い空に向かって、舞い上がりました。

空を舞いながら、せみはバラ色！！ 何処までも、何処までも、揺れながら飛んで行くようです。

そして、見えなくなってしまうました。

今でも不思議なのは、何故か、その間、何時もなら、足場の廊下を走り回っていた大規模修繕工事の作業員たちと、せみが鉢合わせすることは、一度もなかったことです。



休憩時間だったのかもしれませんが？ 作業のくぎりのついたところだったのかもしれませんが？ いいえ、8月です、お盆休みだったのかも知れません？

こんなにも、打ち響く、美しいせみの声に、こんなにも健気なせみの姿に気づくものは、わたしの他には、誰一人いなかったようです。

### テントウ虫のサンバ！！(2015. 8. 31)

8月31日 午後9時頃、暗くなったベランダ側の窓から、何かが入って来たような気がしました。感覚的には、なにか昆虫のようなものだと思います。

せみよりも、もっと、ずーっと小さなものですか？

飛んでいるようでした？ 昨年、夏、アブだと思った昆虫は、立派なせみに成長しました？ 今年もそうなるのでしょうか？

それにしても、我が家の様相は、まるで要塞、去年とは全く違っていました。

何処から、どうして入って来ることが出来たのでしょうか？ どんな魔術をつかって、我が家に辿り着くことが出来たのでしょうか？

どんなに小さな生き物だとしても！！ ベランダ側のメッシュ、シートは、天井で、屋上で閉じられているのですから？

何だか、バタバタと、周囲にぶつかりながら、不器用に照明の周りを、回転し始めました。

これでは、躰がこぶだらけになるのではと、心配になったわたしは、そっと、照明を消しました。

すると、リビングは、急にシーンとした夜に切り替わりました。

もう、どんな声も、触れ合う翅の音も、壁にぶつかる音も聞こえては来ません。

時計を見ると、11時を過ぎていました。

再び照明をつけ、探し回っても、もはや、どんな生きものの姿も、せ

みの姿も見出すことはできませんでした。

ここに現れたこと自体、あり得ないことなのですから、消滅して何の不思議もないのかもしれませんが。

わたしは、諦めてベッドに入りました。もしかしたら、わたしの、切望が描き出した夢だったのかもしれませんが？

羽毛入りの、大きな枕の中央に、深々と頭を沈めました。

そのとき、何かが、何か丸いものが、頭の中央部に、あたりました。

手で探ってみました。髪の毛のなかです。

何だか、ピンポン玉のようなものを、わたしは探り当てていました。

それは、頭と肢を引っ込めていました。胴体は青色？ 紫色に近いのかもしれませんが。テントウ虫くらいの、まん丸い虫です。

——どんなに、探したか知れないのに、こんなところに隠れていたの？ わたしの髪の毛のなかに？

テントウ虫は無言でした。

これでは、いくら探しても、探しても、見当たらなかつた筈です。

蛍光色の、青紫色の鎧の下に、柔らかそうな翅が覗いていました。

わたしが青い胴を指先で、そっと、撫でてやると、安心したのでしょうか、線描きでもしたような、目玉と、触覚が飛び出しました。

無点のテントウ虫です。

気が付くと、わたしは、誘われたように、「テントウ虫のサンバ」を歌っていました。

——赤、青、黄色の衣裳をつけた、テントウ虫がしゃしゃり出て、サンバに、あわせて踊り出す……。

すると、テントウ虫の肢が出ました。

歩き出しました。

——まあい、まあい、お月さま、愛の光で、微笑んで、森の月夜は更けました。

テントウ虫の目が、わたしを見たような気がしました。

——嬉しいの？ そう？ でも、もう、休みましょうか……。

何故か、突然、わたしの瞼が落ちて来ました。大きな欠伸が口を開けました。睡魔に魅入られたように、寝込んでしまいそうです。

眠っても、わたしは、掌の上で、テントウ虫が歓喜の舞を踊っていると、感じていました。

翌日、世界中に朝がきても、我が家に、テントウ虫の姿はありませんでした。

## 花 道 (2015. 9. 30)

——今日は、2015年9月30日の水曜日です。間違いないかしら？

——チャチャ、チャ。

とせみたちは間違いないと伝えてくれます。

——そう、よかったこと、間違わなくて！！ 今日はお天気みたいよ。外、見ますか？

——チャ、チャチャ。と、せみの声が大きくなりました。

大規模修繕工事で、物々しい足場が作られてから、外を見ることも、少なくなっていました。わたしは、久しぶりに、せみを箱ごと持ち上げると、早朝の空を見上げました。

もう、太陽はかなり上に登っていました。

ああっ！！ わたしは、息を飲み、目を疑いました。

太陽から真っ直ぐに、銀色の道が、わたしたちの前まで伸びていました。太陽からは殆ど、等間隔に！！ 遠近法でいえば、拡がりは、ありましたが、それは一本の道のような感じでした！！

——見て見て、見て！！ お日様まで、銀色の道が通ったわ！！ ほら、きれいね！！ まるで、銀粉を散りばめたみたい。太陽の赤を見つめると、メタルみたいに青くなって、それから、再生した赤が、救急車の花

冠みたい回転して、ああ、ああ、道の両側は、桜の花が満開！！  
ああ、ああ、ああ、紫の雲が靡いて！！ まぶしい銀色の道に、まとい  
ついて！！ ね！！ 見えるのでしょうか？

せみは、黙って見上げていました。二つの複眼が、膨れ上がると、様々  
な色を乗せて、小刻みに震えました。

——まあ、今度は、エメラルドグリーン雲が、何層にもなって！！  
ほーら、見て見て、見て！！ 見て下さい！！ 綺麗なこと！！ ま  
るで、オーロラみたいネ！！ ああ、ああ、美しい！！

銀色の壮大な道は、とりどりの色に変化する空の上を、わたしたちの  
前まで続いていました！！

夢ではありません。だって、わたしは、起きたばかりなのですから？  
時計は、午前六時を指していました。

わたしは、懸命に息をつく、保護者の責任感を思いだしたように、  
杏リイのせみをテーブルに戻し、六人の家族と、一人の神様を交互に  
持ち上げては、太陽の道を見せていました。

太陽の光を浴びて、金色になったせみたちの息づかいが、聞こえてく  
るようです。

朝の風に、光の裾がなびくと、光の道は名画のような湾曲を描いて揺  
れ動き、風が過ぎると、真っ直ぐに、太陽からの道は、わたしの目の前  
まで、しっかりと、伸びていました。

それは、誰の道でもない、わたしたちの道です！！

ためらいもなく、そう、信じられるのが不思議でした。その道は、太  
陽から、わたしたちの前まで続いていました。いいえ、わたしの足元ま  
で続いていました。

わたしは、目を閉じると、決心したように、銀色の、おぼろおぼろの  
なかへ踏み込んでいきました。

杏リイのものかも知れない華麗な花道へ！！

わたしは、愛想よく、微笑みを周囲に撒き散らしながら、歩いていきました。わたしは、歌を歌い続けているようでした。

銀色に光る並木が身を振ると、わたしの行く道に、無数の花びらが、降りそそぎました！！

わたしは何時から、歌手になったのでしょうか？

わたしは楽しそうに、歌いつづけていました。

毎日「不思議な家族」と共に歌う、三時間の練習が、こんなところで役立っているのでしょうか？

何だか、自信満々と、得意そうに歌っていました。拍手が聞えました。拍手が鳴りやみません。

それに呼応するように、銀色の花道がリズムを刻んで、わたしを前へ、前へと送り出しました。

わたしは姿勢を正して、誇らかに歩いて行きます。

気をよくしたわたしが、歌に夢中になって、花道から足を踏み外すと、わたしの墜落を食い止めている、夥しい人たちの手を見ました！！

すると、わたしに、急速に疲労がやってきて、喉が、かすれ、渴いて、ひりひり痛みだしました。もう、耐えられそうもありません。

わたしは、桜の花芯に、そっと手をのばし、ほんのすこし、口に含んでみました。

——ああ、ああ、あっ！！

まるで、それが合図だったように、花道の波動が？ わたしを送り返えしはじめました。道は、逆行していきます！！

——いや、いや、嫌です！！ 何故？ あんなに、気持ちよく歌っていたのに！！ わたしが、あんなに誇らかに花道を歩いていたのに！！ 何故、邪魔をするんです？

——我家の人たちがいうのよ。一人くらい、人型で生きていてもらわなくては、困るんだよ！！ って。

誰の声でしょうか？「不思議な家族」の顔が、あちこちで、ちらつく

ようです。

——でも、今更、そんなこと、言われても……。

縮み上がると、わたしは、リビングの床に足を揃えて、壮大な銀色の道を、見上げていました。

蝶か、せみになるわ！！（2016. 3. 15）

愛する家族と共に在って、今、わたしが、どんなに幸せか、そのまま伝えるのは、とても困難な気がします。

それは、暖かい霧に包まれているようで、  
それは、涙に濡れているようで、  
それは、メッチャクツチャな、冒険のようで、  
それは、秘められた犯罪のようで、  
それは、崇高な魂の共演のようで……、

「チャ」の一音であっても、既成の音質とは遠い！！  
「チャチャ」の二音であっても、既成の音調ではなく、  
この死んでいる筈のせみが発する音とは、どう考えても、信じられないのです。

まして、それが、老化した、わたしの体内から発せられたものだと、今に至っても、どうしても、肯定することは出来ません。

ここに、残ることを選択したせみたちも、死んでここに残留したせみたちも、何故、わたしの歌に合わせて、リズムを刻むのでしょうか？

それも、個性的な、二つとない、それぞれのやりかたで！！

わたしには、それが、理解出来ません。それが現実であることが？

まして、凜とした音に、鈴の音のからむような、モーツァルトのピアノソナタに至っては、あらゆる疑問符を吹き飛ばし、せみたちは、わたしに、至福の時を運んでくれます。

このからくりが、わたしにはどうしても、わかりません！！ かなり、自由気儘に、彼らは、歌ったり、歌うのを拒んだりします？

歌うには誰かの意志が影響しているのでしょうか？  
なにか、エネルギーのようなものを必要としているのでしょうか？  
その証拠のように、歌わない時には、みんなが歌わないような、歌う時には、先を争って歌うような？

彼らの自由は、誰かの何か大きな力に支配されているのでしょうか？  
わたしはやはり、何か、尋常でない世界に迷い込んでいるのでしょうか？

いいえ、これこそが、現実世界なのではないでしょうか？ 多分そうです。  
そう思っていました！！ 今まで、知り得なかつただけのことではないのかと……。

今、家族の一人一人から、こよなく愛されていると実感でき、わたしもまた、彼らを愛していることを、伝えたくて、毎日ふらふらになるほど、彼らと共に、歌を歌い、彼らの為に何を為すべきかと、問い続けま

す。  
そんな日常が、またとなく、楽しい！！

——子供みたいだと？ おっしゃるの？ いいえ、わたしは、若年寄りなんです！！ あなた流に言うなら、子供らしい老婆になったのかも知れませんか？

土曜便の電話で、わたしは言ってみました。

——わたしが死んだら、せみか、蝶になるわ！！と。

——蝶の方が、いいよ。と、暫く考えた後で、彼は言いました。  
せみはいい声で鳴くのと、わたしは心のなかで思いました。

——とにかく、会いに行くから、その時は、邪険にしたら嫌よ。と、わたしは言っていました。

——またまた！！ 彼の笑い声が、春一番の嵐に乗って、響きわた

ります。

——男なんだから、ぶっ殺してやる！！　くらいなことを言ってもいいのに。優しいんだから……。変なことばかり言って、迷惑を掛けたっ放しなのに……。

わたしの声は嵐のなかに消えました。

もしかしたら、遺伝的にいって、わたしの家族のように、わたしも又、永遠に生きることが可能なのでしょうか？

まさか？　そこまで楽天的には、なれないけれど……。

でも、もしかしたら、選ばれた人間だけではなく、全ての人間の心は、魂は、生き続けているのだとしたら？

そう思うことに遠慮などいらない筈です。人間の消滅する運命にある「肉体」を捨て、「本質」に返った、わたしの愛する家族と一緒になら、わたしに、怖いものなど、ないのですから。

多分、火葬場で焼かれる時も！！

多分、その煙突を昇るときも！！

犯　罪　2016. 3. 20)

病院に行こうとして、エレベーターに乗り込むと、隣のエレベーターから少年の声が、拡声器に乗って侵入して来ました。

——すごーい

——それほどでもないさ

——殺してやる！！

——誰れを？　パパ？



——うん  
——ママも？

——うん  
——みんな？

——うん

途中の階で、声の主たちは降りたのでしょうか？ 幼い子供と、少年の声でした。

暫くの間、拡大された言葉たちは、わたしの周りで踊りまくっていました。

そこには、子供たちの孤独が、猛々しさが透けて見えるようです。

テレビは、毎日親に虐待され、殺された子供たちの話で満杯でした。それを聞き続ける子供の心に、どのような配慮も払われては、いないようです。

こんな場合、子供は究極の敵として、親を意識するようになるのでしょうか？

また、ニュースは何時も、老人の殺された話で満ちています。見ている老人たちも、ベランダから屈強な若者に、何度投げ捨てられたことでしょうか！！

真実の報道は、それを見聞きするものに対する、どんな配慮もされては、いないのです。

こんな場合、老人は身近な敵として、介護者を意識するようになるのでしょうか？ それとも味方として？

そんな夜半、わたしの血液の循環が、急激に悪くなっていると信じられる症状が、矢継ぎ早やに現れるようになりました。

慌てて、エンディングノートに、如何なる延命処置も望まない旨、尊厳死を希望する旨、書き込みました。

そして、この8匹のせみを、薔薇の花びらと共に、わたしの棺のなか

にいれてくれるよう書き加えました。、

あの空を飛ぶ花びらでも、いいわ！！  
わたしは花びらになって、宇宙いっぱいに拡がってしまう！！

それでよかったのか、どうか？ 彼らの意志は分かりません。でも、彼らには、死はないのですから。

もしかしたら、わたしは、生きている家族を、わたしの棺の中に入れて欲しいと依頼したのでしょうか？ それは、殺人では？

わたしには、過去にも、父母を殺した、兄弟姉妹を殺した、前科があるのでしょうか？

#### 犯罪（その1）

悔いても悔いきれないのは、兄への最後になった、慰問文の末尾に、「お国の為に死んで下さい」と、書いたことです。

人並みに軍国少女だったらしい、わたしは、なんの躊躇いもなく、書いたことさえ、意識していないような、時代の常套語として書いたのです。

兄の戦死後、そのことを、どんなに、悔いたことでしょう！！  
わたしが、兄を殺したのだと……。  
怖くて、怖くて、長い間、誰にも、家族にも、それを打ち明けることは、出来ませんでした。

#### 犯罪（その2.3）

父母が亡くなる頃、わたしは、人の心を読み違え、失恋したと勘違いしていて、もう、生きているのもやっとなで、父母の為に、どのような心遣いをしてやることも出来ませんでした。

思い込みの、激しいのは、そのころも、今も変わりはないのかもし

れません。

正気に戻ったとき、わたしは、父母を失っていました。

これが、犯罪でなくて、何なのでしょう！！

優しい言葉の一つも、かけてあげたかったと、どんなに悔いたことでしょう。「お二人の子供でよかった！！」と、どうして伝えることが出来なかったのかと……。

ずーと自分を責めてきました。

そんなこともあって、天啓のように、わたしの類まれな家族との生活がこのような形で、再び与えられたことが、どんなに心嬉しいものであったか、お分かり頂けるでしょうか？

その喜びを、わたしは、毎日、家族の心に届けと歌います。彼らとの共通語が、音で、音楽である以上、わたしは、どんなに、常軌を失って見えるとしても、許しを乞い、どんなに懐かしいか、愛しているかを伝えたくて、歌い続けます。

地球上に、言葉を持たない種族がいると聞きました。彼らは意思伝達の手段として、言葉の代わりに音楽を選んだのだと！！ 歌うことで意思を伝え、思いを伝え、愛を育み、怒りを収め、自然を讃えて、生きていることを！！

彼らの「せみ」の合唱を聴きました。発音筋の振動が鼓膜を叩いて発声する、せみの歌声が、微妙なビートを刻んで、彼らの体内で増幅し、かすかに開かれた、彼ら、彼女らの唇で震えていました！！

お花見！！ （2016. 4. 1）

2016年4月、春、この国に生きている者の上にも、この国の死者の上にも、平等に、桜の季節が訪れました。

開花予想が、報じられ、例年のように春は鼓動をきざみながら日本列島を駆け上ります。

わたしはこの喜びを、この嬉しさを、この懐かしさを、我が家の家族にも、体感させてあげたいと切実に思いました。

今年こそは、手製の花吹雪ではなく、本もののお花見をさせてあげると、約束しました。

「……弥生の空は見渡す限り、さくら、さくら、見にゆーかん！！」  
歌声に乗って、春のリズムが、最上階の我が家を優しくノックしました。

わたしは人眼の少ない朝を選び、ハート型のチョコレートの空き箱に、せみたちを並べ、思いっ切り、手を上にのばして、桜並木を歩きました。

——ほーら、見て、見て、見て。さくらですよ、綺麗でしょう！！

——チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャ……。

せみたちの声が弾んで返って来ます。

街じゅうに、懐かしい桜の花の匂いが、膨れあがりました。道行く人も、幸福そうな笑顔で、桜を見上げていました。

上に伸ばしていた、わたしの手は疲労したのか、箱はそこが定位置であるかのように、わたしの頭上に乗っていました。

春の吐息が、せみたちの吐息が、聴こえました！！

暖まった空気の輪を、そよ風が、幾つも幾つも巻き上げていました。  
ふーっと、そよ風を吸い込んで振り返ると、背の高い若い男が引き返して来て、わたしの頭上を、箱の中を覗こうとしていました。

——何をするの？ 何と物見高い！！

わたしは、それを、邪険に振り払うように、走り出していました。

桜並み木が、桜色の線状になって過ぎて行きました。

必死でした！！

何故？ わかりませんか？

春に酔っぱらった蝶が、一匹、道路上をくるくる舞いをして、転が

って行きます。

——いずれにしても、不意打ちというのは、汚い手よ。本当に見たいのなら、そう言ってくれたらよかったのに！！

2016年春、わたしは、走り疲れてベンチの上で伸びていました。冒険は終わったようです。

あの若者は何を見たのでしょうか？  
少女姿の老婆が掲げる、ハート型の王冠の上に？

#### 五月の客（2016. 5. 1）

5月1日、我が家に4人の客がありました。昨年ハンサムボーイになったと、驚いた少年は二年生になって、また背が伸びたようです。

彼は縄跳びの綱を持って歩いていました。

彼はわたしに、縄跳びの二重跳びや、三重跳びが見せたくて、縄跳びの綱を持って歩いていました。

彼の小学一年の学校生活は、電車通学で、今迄の車で送り迎えしてもらった幼稚園時代とは、様変わりの、かなり過酷なものに思われました。

それでも、少年は学校を、どんなに気に入っているか、友達といることが、どんなに楽しいかを、家族にわかってもらおうと躍起になっていました。

学校が、こんなにも楽しいものだとは、思ってもみなかったと、嬉しそうに話していました。しかし、彼の帰宅時間に合わせて、車で出迎えていた彼のババは、下車駅で待ちぼうけを食う日が多くなっていきました。

居残りさせられているようでした。微笑ましいとさえ思える子供の日常に、父兄がからんで、多くの問題が事件に変貌していくようでした。

彼は、へこたれては、いなかったのでしょうか？

わたしは、五月の小さな客を待って、掛けてある額をはずし、ベッドの背に、大きな白い壁面を確保しました。

前面には彼が五歳の時描いた青い地球と、六歳の時描いたパンダと、風船を持った彼のママと、二歳の彼を描いた、わたしの絵が、不思議な調和を保っていました。

——ここに、何でもいい、ぼくの描きたい絵を描いてください！！  
条件はそれだけでした。彼は壁画を描いて解放されるのでしょうか？

三十分後、わたしは昂揚し、何とも言えない幸福感で舞い上がっていました。

その絵は、わたしの意表を、遥かに超えたものでした。

それは、想像の動物、竜なのでしょうか？

巨大な明るいグリーンの竜が、炎のたてがみを靡かせ、コの字にくねっていました。口からは花火のような火を噴いています。

大きな人間に似た目が、黒目を寄せて怒っていました。フォークのような前足は、球のようなものを？ 抱いていました。

その球は、何か大切なもののようでした。よく見ると日本らしい、芋虫みtainな本州と北海道みtainな四角が見分けられました。

地球でした！！ 巨大な竜は、地球を抱えて、飛び立とうとしていました。

躰を覆う、グリーンの波状の鱗と、背から尻尾まで続く、三角形の鰭のオレンジが陽気なリズムを奏でていました。形のよい白い雲が二つ、中空に浮かんでいます。

塗り込めないクレヨンの荒々しいタッチが、絵に力強さを、迫力を、品位さえ感じさせます。

これは、紛れもない七歳児の作品でした！！

——かなわないなあ！！ わたしは手をあげました。

——フン！！ 鼻に皺を寄せた彼と、派手な壁画に囲まれたこの部屋は、バランスを保って、幸福そうに息づいていました。

わたしは、少年の可能性をそこに見たような気がしました。

——このせみ、生きているの？ 絵を描いていた少年が、リビングに戻ると、ずっと、気にしていたように、わたしを見上げました。

わたしは、ツクツクボウシの宝石箱を取り上げると、トルコ行進曲を歌ってみました。

突然のことに、せみも驚いているようでした。

もう一度、歌って見ました。

——ティアララン、ティアララン、ティアララララララ、ティアララ、ティアラ、ティアララララララ、ティアララ……。

切れのいい澄んだ音が弾んでいました。

大急ぎで宝石箱を、少年の耳元に持って行きました。

——ああ、ほんとだ、聞こえる—！！ 少年は声をあげました。

——ほんとに、聞えるよ、ママ！！ 少年は母親の手を引っ張りました。彼のママは当惑しきっているようでした。

わたしは念のために、もう一度繰り返してみました。

——本当に聞こえるよ！！ 少年はママに訴えました。

困惑しているママが、いました。

——それはね……。 言いかけ、わたしの顔を見て、言葉を呑み込んだのがわかりました。

——お茶にしましょうか？ わたしは、慌てて場面を転換させました。

今日のところは、これで、満足でした。

少年には、せみの声が本当に聞こえたのです！！

わたし以外の人間に、録音ではない、生の歌声が、二度までも確かに聞こえたのです。泣き出したような感動が、わたしを根底から揺さぶっていました。

少年の耳元に持って行っても、せみは多少遅れても、リズムが狂っても、「ティアララララララ、ティアララ」の部分は何回でも繰り返し歌ったのです。

彼は、わたしの声ではなく、その声を捉えたのでした！！

でも、保護者にとっては、少年に変な先入観念を、間違った知識を植え込まれることに、危機感を持ち、警戒していたに違いないと思われます。

彼らの困惑が伝わって来るようです。

子供連れで、我が家を訪問するには、逡巡があった筈だと信じられました。彼らの身になってみればわかることです。

それを察して、以後わたしは、その話を蒸し返すことはしませんでした。

少年は、大人の会話の中で、多分、何かを感じとっていたのではないのでしょうか？ ですから、

——本当に聞こえるよ！！ と。

## 第 5 部

開かれた窓！！（2016. 8. 6）

わたしも、飛び立つ準備をしなければならないようです。助走に入った今、反攻するように空が逃げます！！

空がなければ、飛べないのでしょうか？

大規模修繕工事も終わり、マンションを覆っていたメッシュ、シートが取り除かれてから、半年になります。この建物は、窓は、再び外界に開かれました。

2016年8月6日 午後10時 せみが一匹ベランダ側から入ると、リビングの照明の周りを回転し、やがて、天井の壁に落ち着きました。

アブラゼミで、よく鳴きます。

「ジージージー」というより、「チチ、チチ、チ、チ」に近い音でした。

わたしが歌っても、せみは、リズムをとることもしないで、わたしに向かって話続けました？

何年経っても、わたしに進化はなく、相変わらず、「せみ語」がわか



りません。

せみには、5、6年も経ったら、いくらなんでも、もう、理解している筈だという先入観があるのでしょうか？

——そう、わかったわ！！　じゃ、お休み！！

わたしは、まるで劣等生が答案を隠すように、素早く照明を消して、顔を隠しました。

8月7日起きた時には、もう何処にも、せみの姿は見えませんでした。一昨年のアブからせみになったように見えたせみは、翌日、エメラルドグリーン美しいせみに変身しました。

今年のせみには、そのようなドラマは用意されてはいませんでした。探し疲れて、窓を開け放つと、「チチ、チ」鳴き声だけを残して、せみは飛んで行ったようでした？

あんなに探したのに！！　髪を揺ると世界の明度が変わったよう気がしました。

8月10日午後11時頃、何か小さなものが入ってきたような揺らぎを認めました。

左胸のあたりで、わたしは無意識に食い込んでくる何かを引きはがそうと必死になっていました。

——なあに？　何かしら？

見ると、オフホワイトのクッションの上に、わたしが引きはがしたらしいテントウ虫が一匹、頭を隠して丸まっていた。

懐かしい気分がリビングに蔓延し、顔見知りに出会った喜びで湧き立ちました。

——ああ、思い出した！！　去年、何処からか飛びこんできた？　無点のテントウ虫と、瓜二つじゃない！！

空色のテントウ虫です。「テントウ虫のサンバ」を歌いながら眠りについた、あの時のテントウ虫です。

——あなたは、去年も来てくれたでしょう？ わたし絶対忘れないもの。だって、メッシュ、シートで覆われた筈の外部から、どうして来ることが出来たのか？ ずーっと考え続けていたんですから？

——チチチ、チ、チ

テントウ虫が、小さな小さな声を出しました。小さくても、か細くても、切れのいい鳴き声です。

——ああ、声がだせるの？ テントウ虫って、鳴くんですって？  
鳴くのが普通なのかしら？

わたしは、クッションの上に顎を埋めて、テントウ虫と視線を合わせていました。

——わたしね、もう、死にそうなんです。何もかも、うまくいかなくて助けて下さい！！

テントウ虫の、長い髭が大きく揺れていました。

テントウ虫は、催眠術の大家なのでしょうか？ 去年も歌いながら眠っていたテントウ虫が絨毯の上に、転がっていました。

死んでいるのかと心配すると、頭と肢が同時に出ました。

わたしの頭の下敷きにならなくて良かったと、胸を撫で下ろしました。掌に乗せると、ハイビスカスの木に移しました。

ふと、息を呑みました、呆然としました！！

リビングの照明を受けて、今、テントウ虫は、エメラルドグリーンに輝いていました。肢は、腹面は、滑らかに一点の曇もなく金色！！ 本当に、紛れもない黄金色です！！

こんなに美しいものを見たのは、何年振りでしょうか？

そうです！！ あの蝶や、せみと同じ、あのエメラルドグリーンでした。

エメラルドグリーンと、ゴールドの組み合わせは、始めてでしたが、不思議にマッチして、何と美的であることか！！

これが、何の符号なのか、わたしには分かりません。  
でも、夢で無いことだけは、分かっていました。

それから、わたしの全身が、幸福な気分を満たされていることに気づきました。何時かと同じように！！

ベッドに入ったのが遅かったからでしょうか、起きると日は高く昇っていました。

どんなに呼んでも、どんなに探しても、もう、何処にもテントウ虫の姿はありません。

飛んで行ってしまったのです！！

掃除機をかける為に、リビングの椅子を、移動させていました。すると、椅子と椅子の間に転がっている、テントウ虫に気づきました。

——こんな処にいたの？

わたしは絶句しました。 死んでいました！！

テントウ虫は空色に、グリーンが混じった深い色合いを見せてはいましたが、あの輝かしいエメラルドグリーンも、美しい金色も、二度と見ることは出来ませんでした。

これが、我が家に残った1番目のテントウ虫です。

杏リリーの箱の脇に、並べて置いて貰うことにしました。

今迄、輝かしい蝶も、輝かしいせみも飛び立って行ったのに、輝かしいテントウ虫だけは、こうして、我が家に残ったのです。

サインの無いまま、2016年8月13日、午後10時、玄関ドアを開けて外に出て見ました。廊下には何も物も見えません。

見上げて、表札の脇にもせみの姿はありませんでした。

毎年、せみが訪れてくれたとは言っても、年が変われば、来ること事態、夢のまた夢！！

昨年のお跡の訪問のあとでも、そんなことなど、あり得ないこととし

て括られ、深夜、独りで無人の廊下に立っていると、せみの現れることなど、もはや、現実には無いだろうと、信じられるのでした。

——そんなことなんて、あるわけ無いんだから……。

嘯くと、何もかも、素直に分かって来るから不思議なものです。

今迄が異常だったのだと。総ては偶然に過ぎなかったのだと。

8月14日早朝、わたしは執拗に、玄関のドアを押して通路に出ました。表札の脇に、せみの姿はありません。長い廊下にも、何ものの姿もありませんでした。

ほっとすると、隣の壁に張り付いている、枯葉のようなものに気づきました。

よく見るとせみです！！そこは、昨年メッシュ、シートに覆われたなか、一匹だけ訪れてくれたせみの張り付いていた場所です。

小さな、アブラゼミでした。背にV字型の白い紋様が、浮き立っていました。

——やっぱり、来てくれたの！！

部屋に戻ると、何時ものようにハイビスカスの木に止まらせました。

このせみは、小鳥のように、わたしの手に乗って歌いました！！

爪が、わたしの手の甲に食い込みます。今年のせみに似ていました。

エレベーターに乗って、見送ってあげた、あのせみに！！

今年の夏、何故か、せみも、テントウム虫も、復習でもするように、昨年をなぞるように現れました。

そして、テントウム虫は残り、アブラゼミは、わたしの手の上で逡巡した後、8月14日、午後7時、中庭から飛び立って行きました。

——むかつくなあ、えれえ腹あたつ！！そんなに飛んでえなら、飛んでけー！！

酔っぱらった男が、空を指さしていました。

影 絵 (2016. 8. 22)

今年の夏は台風に災いされ、雨も多く、寒いような、暑いような、何ともすっきりしない日々が続きました。

そんな、ある日、寝室のレースのカーテンに映る、美しい影絵に、目を奪われました。

幻覚ではないかと思いました。

日没前の陽光を受けて、レースのカーテンに映る青い翳が、せみの複眼の両脇から、流れる肩の線が、翅の先まで、それは優雅な、美しい輪郭を保っていました。

ああ、現実に戻りました。

通気のために、窓を10センチ程、開けて置いたことを、すっかり忘れてていました。

その間から、せみは入り込み、カーテンに取りついたのでしょうか？

寝室の照明をつけ、怯えさせないように、そっと、手を伸ばしていきま

した。  
手がせみに触れたと思った時、せみは微かに躰を震わせて舞い上がりました。

大きなアブラゼミでした！！

せみは、差し出した、わたしの手を振り払うと、寝室の壁の上段に止まりました。

じっと、前面の壁を見つめています？

そこには、少年の描いた、巨大な竜が地球を抱えて飛び立とうとしていました！！

——ああ、これなら、少年のタロが、今年の五月、描いた絵です！！

わたしは、嬉しくなって解説を加えていました。せみが向きを変えました。

——ああ、こっちは、やはり、少年が5歳と、6歳のときに描いた、青い地球と、大きなパンダです。その向こうは、少年と少年のママ。風船を持って、可愛いでしょう、わたしが書いたんですよ。少年が2歳の頃です！！

せみは無言で、じっと、それを見つめていました？  
わたしは、始めて、せみに壁画を紹介出来て満足していました。

せみたちは、今迄、何時も玄関から、または、ベランダ側の窓から、リビングに直行しましたので、この部屋に立ち寄ることはなかったのです。

せみは鳴き声一つたてずに絵に見入っているようでした。そんなに気に入ってくれたのでしょうか？

どこから来るのか、光のくずが、壁画の上を走り回っていました。  
せみは終始無言でした。時々位置を変えて、壁の絵に見入っているようでした。

わたしは、薄暗くなった、ダイニングとリビングの照明を全灯にし、寝室の照明を消しながら言いました。

——こっちに、移って下さい！！ 明るい方へ移動しましょう！！  
みんなも、待っていますから。

わたしは、いとも自然に、せみを置き去りにしてリビングに戻りました。  
今迄のせみの行動が、わたしにインプットされていました。やがて、明るい方へ、せみは飛んで来る筈です。

それは、時間の問題のように思われました。わたしはせみを待つ間、パソコンに向かい、たまりに、たまった受信メールの整理をしました。

何時間たったのでしょうか？ せみはいくら待っても、リビングに現れませんでした。

慌てて寝室に走りました。もう、あの、聡明そうな美しいせみの姿は、寝室の壁の上段にも、天井の壁にも、ベッドや絨毯の上にも、ありませんでした！！

何処を捜しても、どんなに探しても、せみは、もう、二度と、わたしの前に姿を見せては、くれませんでした。

——何故？ 何故なの??

——台風が来るんだよ、せみにだって、空いている窓から入って、台風をやり過ごすくらいの分別は、持ち合わせているさ！！

上機嫌な科学者の声が、電話の向こうで、跳ね上がりました。

——それに、無言だったのは、あなたの言うように、考え深いのではなく、雌だったのだろう！！

彼の声が、笑いながら追いかけてきました。

時計を見ました。2016年8月22日、19時30分。せみの影絵を発見したのは、2時間ほど、前のことです。

何故、あのとき、せみを置き去りにしたのか？

しかも、ご丁寧に、照明まで消して？

もしかしたら、あれは、子供の頃、絵の天才だと囃されていたという、兄だったのかも知れないのに！！

コガネ虫！！（2016. 9. 1）

ひんやりとした湿気に満たされた、台風と台風の間。  
わたしは買い物に行こうと、ドアを押して廊下に出ました。

表札の脇にも、共用廊下にも、もはや、どんなに探しても、せみの姿はありません。

あのせみを最後に、今年の「不思議な、不思議な夏！！」は、今度こそ、終わったのでしょうか？

今日は、9月1日、もう秋です！！

そう思った時、右手、防風スクリーンの下に、小さな虫がひっくり返っているのに気づきました。

表返しにすると、小さいけれど、我家に残ったテントウ虫と、親子のように類似していました。また厄介なことに、なりそうな予感が来て、わたしは差し出した手を、ピクッと引っ込めました。

——わたし、これから買い物に行くんです。悪いけど、わたしが帰って来るまで此処で待っていて下さる？

台風の名残の風が吹き抜けました。テントウ虫は、いとも簡単に吹き飛ばされて、またも廊下の溝に落ち込みました。

——この柱の陰にいなさい！！

持ち上げると、わたしは我が家の前まで戻り、スクリーンの柱の前に、テントウ虫を置くと、命令しました。

風は小休止していましたが、台風の余波は何時Uターンして戻ってくるかわかりません。

大気が、入り乱れていました！！

わたしが買い物から帰った時、この虫が此処にいる保障は何一つないと信じられました。

それなのに、わたしは、例え偽善者と罵られようと、我が家に戻って、安全な場所を、このテントウ虫の為に確保してやろうとは思わなかったのです。

買い物から戻って、同じ位置にいるテントウ虫を発見した時は驚愕しま



した！！ 天罰だと思いました！！

——本当に、待っていたの？

罪悪感に襲われたわたしは、荷物を廊下に投げ出すと、テントウ虫を、リビングの定位置、ソファの白いクッションの上に運びました。

見つめても、我が家に残った一番目のテントウ虫と、そっくりなのに、小さいからでしょうか？ 新来のテントウ虫は、何故かテントウ虫という感じがしません？

あのテントウ虫のふっくらとした、陽気な情感を欠いているような、そんな気がしました。

もしかしたら？ 違うのかも？

そう思ったわたしは、気がつくまで百科事典を繰っていました。

わたしが、テントウ虫だと思って来た虫は、コガネ虫でした。

無点のテントウ虫だと、わたしの思い込んで来た虫は、どれもコガネ虫だったようです。

百科事典には、我が家に残った一番目のテントウ虫と殆ど、寸法も形も、瓜二つの虫が載っていました。

色は緑色。成虫は樹の葉を、幼虫は木の根を食い荒らす害虫だとありました。

——そう、あなたは、害虫なの？

クッションに顎を埋めて、目線を合わせても、コガネ虫は無言でした。

——ううん、いいのよ、そんなこと、わたしも、そんなものなんですから……。

背を撫でてやると、頭と肢を引っ込めて、丸くなりました。

このコガネ虫は朝になると姿を消し、夕方になると、壁のあたりに突き当たる音をさせて、また帰って来ます。

そんな日が、何日か続きました。

わたしは、親愛の情を込めて「コガネ虫の唄」を歌ってみました。

「コガネムシは金持ちだ、金蔵建てた、蔵建てた！！ 子供に水飴買って来た！！」と。

「チチチチチ、チチチチ」コガネ虫は小さな音をたて、金色の肢でクッションの縁を一巡りしました。

——もしかして、もしかして、あなたは幸運を運んで来てくれたの？  
わたしは言っていました。

その時、突然、閃きました。この虫は、もしかしたら食事のために、葉っぱを食べ、水を呑むために、毎日、お勤め人みたいに出かけているのではないかと？

ベランダに出ても夏枯れで、葉っぱらしい葉っぱは、見当たりません。わたしは、匂いが気になりましたが、アジサイの葉に水を数滴、滴らせると、クッションの上に置きました。

コガネ虫は、葉脈にそって、柔らかい葉っぱの部分を器用にギザギザの歯で食べ始めました！！

それから、満腹になったのか、丸くなって眠りにつきました。

麻薬のような眠気が、わたしの上にも落ちて来て、コガネ虫と並んで、白いクッションに頭を乗せて眠りました。

翌日、コガネ虫は、我が家に残ったコガネ虫の前に座り、テレビを見ていました！！

親子だったのでしょうか？ 正体は誰なのでしょう？

杏りりイだとは、わたしには思えませんでした？

新しいアジサイの葉に乗せてやると、葉脈に沿って頭を突っ込んでいきます。見る間に、葉っぱには、幾つもの穴が開きました。

満足そうな目が盛り上がると、わたしを見て笑ったような気がしました。

それから、全身を毬のように丸め、どんな敵も、味方にせずにはおかない愛らしさで、コガネ虫は眠りについたのでした。

深い緑色の躰から、金色の薄翅が覗いていました！！

照明を消しても、何故か、壁紙の上を金色の光の縞が何時までも流れ

続けていました！！

翌朝、わたしが、目覚めた時、太陽は既に真上に昇り、世の中は煙み  
たいなもので満たされ、白いクッションの上に、コガネ虫の姿はなかつ  
たのです。

あれが、別れだったのだと、わたしには、何故か解っていました。

アジサイの葉の上には、幅二、三ミリ、長さ二センチ程の長方形の緑  
が、影をつくっていました。

#### 愛の妙薬（2016. 9. 27）

赤とんぼを見ました。何十年ぶりでしょう？

赤です、あの懐かしい、暖かい赤を見ました！！

リビングのガラス窓に沿って、外側から何かが、「入りたい！！」と、  
「入れて下さい！！」と、わたしに要求しているような気がしました。

逆光で、それは、黒くて、黒は右に左に、位置を変え、窓ガラスに、  
キスをしては、舞い上がります。カトンボよりは大きいように見えました。

「どうぞ！！」

わたしは言って、飛び込んでくる勇姿を想像しながら、窓を開けました。

ああ、それなのに、次の瞬間、何だか、ややこしいことになっていまし  
た。

黒いものは、わたしの期待に反して、衝撃でも受けたように、窓のレー  
ルに墮ち込んで、丸まってしまったのです。

何度助けようと思っても、お手玉みたいに、わたしの指先で弾んで、又  
も丸まって位置を変えるので、どうしても、助けることが出来ません。

わたしの指先に触れると、丸まったまま、戸惑った目で、わたしを見上  
げました。

ああ、とんぼの目玉？  
丸まっても、それは、まぎれもないとんぼでした！！  
わたしは、右手を差し出したまま、待ってみました。  
やがて、とんぼは、わたしの指先に止まって、ほっとしたように翅を、  
胴体を伸ばしました。

翅が真横にピンと張りました、銀色です！！  
曲がっていた腰が、徐々に伸びました。胴体は、赤、赤です！！  
懐かしい赤とんぼでした！！

赤とんぼを見ました！！ 何十年ぶりでしょう？  
赤です、とんぼは、あの懐かしい暖かい赤を着ていました！！  
赤とんぼは、何十年もの間、建物の最上階の我が家に現れたことは、  
一度もありませんでした。

それは、故郷で、子供の頃見た赤とんぼです！！

ややこしかったのは、とんぼは外から来たのではなく、締め切った、  
リビングルームの中にいたのです。  
そう理解出来たときは、驚きでした。  
でも、いきなり窓を開けられて、びっくりしたのは、衝撃を受けて  
転がり墮ちたのは、赤とんぼの方だったのですから……。

わたしは、びっくり人間、になって久しくなります！！  
杏リリイの亡き後、これでもか、これでもかと、不思議はわたしを  
襲い続けました。

そして、今日も！！  
一体、このとんぼは、何時、何処からやって来たのでしょうか？  
ベランダ側の窓は開けてありました。そちらから回って来たと考え  
るのが妥当なのでしょう。

でも、わたしには、そうとは、とても思えませんでした。  
リビングルームは締め切ってありましたから。

わたしは、指先に止まっている赤とんぼを見つめ、小さな声で歌いまし  
た。何時の頃からか、何ものかに対するとき、言葉よりも、歌で反応する

習性が身につけていました。

——夕焼け小焼けの、赤とんぼ、負われて見たのは、何時の日か？ 十五で、ねえやは、嫁に行き、お里の便りも絶え果てた。

赤とんぼは、飛び立ちもしないで、静かに聞いているようでした。

わたしは、気をよくして、もう一度、声学家の気分で歌いあげました。

——夕焼け小焼けの、赤とんぼ、負われて見たのは、何時の日か。十五で、ねえやは、嫁に行き、お里の便りも絶え果てた。夕焼け、小焼けの赤とんぼ、止まっているよーと、竿の一先！！

それにしても、歌いながら、歌詞の古めかしさに驚いていました。

何時頃、作詞されたものなのでしょう？

十五でお嫁に行くだなんて？ 赤とんぼは、じっと、それを聞いているようでした。

——あなたには、不思議ではないの？

わたしの指先に、とんぼの震えが伝わって来ました。

驚いて、大きな目を覗き込みました。

覗いても、見極めのつかない焦点はもっと、奥の奥、深奥なのだ分っています。

覗き込まれた赤とんぼは、何を思ったのか、躰をくねらせると、突如、飛び立ちました！！

心を覗き込まれ、くすぐったくなって、笑いを堪えきれなくなったのでしょうか？ 赤とんぼは真上に、2016年9月27日の、秋空ともいえない曇天の中に、消えて行きました！！

わたしは、不思議な家族に向かって、ささやきます。

赤とんぼを見ました！！

赤とんぼを見ました！！

懐かしい赤とんぼを見ました！！ と。

我が家では、杏リリイが亡くなってから、不思議が日常になっていまし

た。何時の頃からか、我が家のパソコンの裏側に、1匹の蚊と、1匹のハエが住んでいるようになりました？

わたしがパソコンに向かっていると、深夜、パソコンの周りを周遊するのです。

季節が秋になり、冬になり、春になっても、それは続いていました。

気づけば、それは、もう何年にもなります。

出てくるときは1匹で、2匹一緒に出てくることはありません。決して邪魔にならないつつましきで、力づけてくれているように思われ、ともしたら、パソコンに打ち込んでいるのは、彼らなのではないかと思ったりしました。

そして、輝かしい日の出には、ハエは、金色の翅を震わせてリビングのガラス窓に沿って歓喜のダンスを踊ってくれます！！

蚊の方は、赤家蚊に似て、長い肢をもっていますが、わたしの顔や腕にとりついて、決して刺すことはありません。

テレビをつけると、テレビの周りを一周してから戻ってきます。

心は、魂は、自由で、何処にでも、好きな時に、すきな処に、存在出来るのでしょうか？ 何時もは、せみにあっても、わたしたちが、愛車を選ぶように、次々、目に見える動くものに、欲するものに乗って存在することが可能なのでしょうか？

あるいは、何時もは、大気の中にあって、風の中にあって、常に、わたしの、そばに在り、乗り移るものを、選択しているのでしょうか？

それは、目に見えるものしか信じない、わたしに対する、思いやりなののでしょうか？ それとも冒険なののでしょうか？ それとも愛の妙薬だとも？

晩秋から冬にかけては、紡錘形の白い鳥がベランダの柵に止まって、「チィ、チィ、チィ、チィ、チ、チ、チ」と、鳴くようになりました。

かなり大きな鳥です。

ヒヨドリかと思いましたが、白いので、違うのかもしれませんが。この鳥は2匹で来ることも、1匹で来ることもあります。わたしが気づくまで鳴き続けました。

——昔はこんなこと、なかったのにと……。我が家の「不思議な家族」に話しかけても、何故かそんなとき、答えは返っては来ません。

ただ、そんな日には、モーツァルトの、ピアノソナタを歌う彼らの歌声は、転がるハンドベルの音に、鈴の音が戯れるような、可憐で美しい音色を響かせてくれます。

ここにあって、彼らには、彼らの目的が、役割のようなものが、あるのかもしれない。

人生最期の整理に入った、わたしの手に、杏リリイ宛の一枚の葉書が握られていました。

そこには、「……愛の妙薬を、編集に回しておきました。次作書き始めて下さい！！」と、ありました。

その編集者の訃報を聞いたのは、何時だったのでしょうか？

信じてよ、言葉の力を！！（2016. 10. 15）

せみの乗っている、楕円形のマキシムの箱を持ち上げると、荷電されたように、彼らの発するバイブレーションが、わたしの皮膚の下を波動をつくって移動していくのがわかります。

毎日、3時間の歌の時間は継続されました。みんな楽しそうです。普通の曲では、ところどころで、「チャ」「チャ」「チャ」とリズムを刻む彼らが、モーツァルトのピアノソナタでは、少々遅れをとっても、とちっても、それぞれに「タタタタタタタ、タタタタ……」

テンポの速い、ビートを刻み、やがて、「リリリリ、リリリリ、リリリリリ……」と鈴を振るような音を響かせます。

わたしは、うるうるし「素敵、ステキ」と呟きます。

すると、彼らは「ジュ、ジュ、ジュジュジュジュ」というような昆虫特有な、ハスキーボイスで答えてくれます。

その音は彼らの深みに消え、紛れもなく、会話が成立したことを、わた

しは理解します。

この、彼らの発する感覚的な部分を、何とか、真実に近いものとして表現したいと、伝えたいと、心から願って来ました。

それなのに、何度試みても、真実に迫ることは出来そうもありません。

——信じてよ、言葉の力を！！

と、声がしました。

——チャチャチャ、チャチャ、チャチャチャチャチャ！！

せみたちの声が一際、高くなりました。

この「不思議な家族」と共にあって、彼らの言葉を、わたしは通訳なしに聴き取ることが出来るようになったのでしょうか？

——そう、信じたいわ。でも、わたしは、そんな能力を持ち合せてはいないのよ。

耳に指を押し込むと、隙間から忍び込み、

——チャチャチャ、チャチャ、チャチャチャチャチャ！！

彼らの声は膨張し、わたしの脳天に向かって吸い込まれていきます。

今迄も、わたしが、その音調の美しさを讃え、その感動を惜しみなく伝えようとするとき、彼らとの間に会話が生まれることを、意識して来ました。

それは、一際、硬質で澄んでいるのに、シュシュ、とか、ジュジュという音を伴う、複雑な音で、語尾はせみの内部に消えました。

この内部に消える感覚は、独特なもので、オーバーに言えば、彼らの深みに、魂に達した！！ そんな風を感じられたものです。

核心に辿り着きたい、わたしが、彼らの一つ一つの言葉の前で、音の前で逡巡するとき、わたしの家族は、揃って、言葉を失ったように無口になりました。

——安心して、わかっているのですから！！

わたしが順番に、彼らの背をそっと撫でると、せみたちのうるうるした大きな目は、光を写して、小刻みに震えました。

——わたしが、ここで、「生きる」と言うことが、どういうことなのか、最期と思われる時にきて、漸く、わたしにも、わかって来たわ。そ



れは、わたしの家族を、生かす為の「生」なのではないかと。最後に生き残った、わたしにも、何か、役割のようなものがあるのではないかと？

いや、あるに違いないと、そう思われてきたのよ？

彼らは、無言でした。

家族の中にあって、ただ甘えるしか能のなかったわたしが、自分の存在を、そんな角度から捉えたことは、今迄、なかったことです。

これが、お迎え現象ではないかと、考えたことはあっても、自分の役割などと、考えたことはありませんでした。

大変な苦勞を重ねて、多分、あの世から？ やって来ただろう、わたしの家族は、わたしと共に歌を歌い、テレビを見、パソコンに向かう、この単純な生活に満足している筈がない！！ という思いが、わたしの中で大きくなって行きました。

彼らに聞いたからと言って、エンディングノートに、薔薇の花びらと共に、彼らをわたしの棺の中に入れてくれるよう頼むことくらいしか実行出来なくなった、余りにも無力なわたしが、彼らの願望を叶えられる筈のないことが、分かっていたから。わたしは、雑用に紛れ、彼らに、問う時間を遅らせて来ました。

年月はわたしの「不思議な家族」の上にも、容赦なく降りかかり、わたしが老いたように、彼らの体力も、日毎に弱って行くように見えます。

何故か、空が海に沈んだ感覚は、今も残っていました。空の青、海の青にわたしの家族は、それぞれの傷を癒したのでしょうか？

時は来ていると思われました。

わたしは、彼らに、改めて聞いて見ることにしました。

何かしたいことがあるのではないかと？

どうありたいのか？

真の目的は何であるのか？ と。

わたしの問いは、わたしの体の中で木霊をつくっていましたから、もう何千回も言い続けて来たような錯覚に陥って、問いは、わたしの喉元でからまわりをしていました。

——ジュジュ、ジュジュ、ジュジュジュジュジュ、ジュ、ジュジュジュジュ、ジュジュ。

彼らは、何か訴えていました。

——話がしたい？ もっともっと、話がしたい！！ そう言っているの？

——ジュジュ、ジュジュ、ジュ。

せみたちはそう言っていました。いいえ、そう言っているようでした。

それだけでいいのだと、そう言っているようです。取越し苦勞が過ぎたのでしょうか？

——それでいいの？ 何か、したいことが、あるのではないかと？

せみは無言でした。

——旅行がしたいとか、故郷に戻りたいとか？

——チャチャ、チャ。

ええっ！！ あのお墓に戻りたいの？

わたしは、動顛しました。

せみは無言でした。

——違うわね、だって、帰りたければ、何時だって帰ることが出来るんですもの、わたしと違って。ここにいると言うことは、何か？

せみは無言でした。

——何か、したいことが、し残したことがあるのかしら？ あったら、教えて下さい。例えば、なにか伝えたいことが、書き残したことが、あるのなら、そう言って下さい！！

——チャ、チャ、チャチャチャチャチャ、チャ！！

せみが飛びあがったような気がしました。

この体の有機質、燃えるべきものが燃え尽きた後の、構造式も不明な、目にも見えない、無機質なもの、魂！！ それこそが、人間の本質なのだ、わたしの家族は、伝えているのでしょうか？

——今迄だって、真に生きてきたのは、愛し、喜び、悲しみ、憎み、苦しんで生きてきたのは、心だったのだと、わたしにだって、分かっていたわ！！

——そう、信じてよ、言葉の力を！！

彼らの声がしました。 言葉を捜す、手が見えます。

わたしが、太陽に手をかざすと、それが、答えだとも言うように、10本の指が、炎の樹になって、燃え立ちました。

#### 招待状(2016.10.15)

わたしは、このマンションに住む、一人の優しい女のひとに、美しい人に、招待状を出そうと思います。そのひとは、96歳のお母さまの介護中で、ずっと、実家に帰っているので、その時が来たら、招待状を投函する約束になっていました。

目的は、わたしの、「不思議な家族」の声を、その人が捉えることが出来るかどうかを、試すためです！！

わたしが、歌った時と、その人が歌った時とに。

血縁のない人に、果たして、わたしのこの「不思議な家族」の、せみたちの声が、届くのかどうか？

偶然というには、あまりにも、多すぎる偶然のなかで、わたしは、そのことに拘り続けて来ました。ボイスレコーダーなどという、機械ではなく今度は、生身の人間として？

すでに、7歳の少年は、聞えたと言いました！！

あとは、他人の大人と、血縁の大人に、聞いて見ることに決めたのです。

どんなに、身勝手といわれようと、その結果が、わたしのこの10年を、空中分解させてしまうものであるとしても！！ もう、後戻りは、出来ないようです……。

わたしは、2016年10月20日 彼女の郵便受けに招待状を投函しました。

30日、彼女から電話がありました。

——11月7日の午後1時頃なら伺えます、と。

——お母さまがお風邪なのに大丈夫なのでしょう？

——楽しみにしています。彼女の明るい声を残して電話は切れました。

真実は静かにしている筈がない、いずれ叫び出すに違いないのです。その日は近いのでしょうか？ わたしには、それまでに良い環境を用意する責任があるのかもしれませんが？

わたしは、彼女の訪問を隠したまま、わたしの家族に対していました。心なしか、みんな元気がないように感じられます。

何だか、耳に新品の分厚い鼓膜が張られたような、わたしの家族との距離が遠くなったような、そんな気がしました。

いいえ、何かが違っているようでした、それが何なのか、わたしは図りかねるまま、日課を始めました。

——お早うございます。今日は2016年11月1日、火曜日です。間違いないかしら？

わたしの不思議な家族は、無言でした。

何故、応えてくれないのでしょうか？

「心があるから、わたしは不幸でした」突然そんな思いが降りて来ました。

わたしは慌てふためいて、「心があるから、わたしは幸福でした」に、すり替えました。

歌っても、わたしの声だけが宙を漂い、彼らの反応は返っては来ませんでした。彼らはストライキでも始めたのでしょうか？ 先日まで、もっと話がしたいと、打ち明けてくれていたのに！！

彼らは、もう、此処にはいないようでした！！

どんなに歌っても、どんなに叫んでも、彼らに届いてはいないようです。

何だか彼らの空間がせみを乗せたまま、軽くなったような気がしました。

何故？ わたしを、一人置き去りにして、わたしの家族は何処に行ってしまったのでしょうか？

さよならも言わずに？ 何が気に入らなかったのですか？ わたしは、途方に暮れていました。焦ってもいました。

よりによって、こんな時に！！

11月7日は、もうすぐそこです！！

永別の詩（2016. 11. 5）

わたしは、わたしの家族を探し、あらゆる手を尽くしました。そして、未整理の手紙の中から、褪色した1通の手紙を探り当てました。

それは、ツクツクボウシの姉が、兄の戦死の内報を知って、父母に寄せた手紙の裏書きにありました！！

敗戦真近な、あの時代に、書き記した永別の詩です。

戦争の魔法にかかった、戦争の罨にかかった、その格調の高さが哀しい！！

南海に散った弟へ

弟よ、彰よ

まだあどけなく きよらかな 稚い弟よ

汝は 昭和19年 2月 6日

あゝ その日 南冥の嵐に

未だ蓄かたきまま ついにひらかず

いさぎよく散りたり

弟よ 汝が叫び 終の叫びを

ちちのみも たらちねも はらからも

きかんとて 耳澄ますなり

きこゆるわ

八重の汐路 千里のへだちも今はなく

大君の万歳叫ぶ 汝が声音

汝がほほえみ

弟よ 彰よ

汝はすでに御国の柱ぞ

八紘を宇となすべき その柱ぞ

小さけれど いと堅きその柱

そのもとにわれら安けし

ありがたきかな 尊きかな

汝は 神になりしなり

弟よ わが可愛ゆき弟よ 彰よ  
弟なれど 弟ならず  
仰ぎみる神となりたり  
生死超えいと高き神となりたり  
めでたきかな 拍手うたん  
うち響け 南海へ その底へ その島へ

弟よ 彰よ  
南の窓開き その窓の辺に  
せめてもの手向けとて わが置きし花束や  
れんげ草 野の花なるぞ  
われらかみより つつましく生い立てば 汝もわれも  
人知れぬ野の花を めでしなり  
匂ふかや 見ゆるかや 弟よ彰よ

ああ 雲切れし青空に  
笑うなり わが弟は  
いつの日も 生きてあるなり  
いつの日もわれら励まし

弟よ 彰よ  
二十一の生涯みに 汝が極めし正道を  
これよりは 鏡とはせむ  
親子ともども、手をとりにて続けてゆかむ  
口ひびくうらみなるぞや  
その敵をうちくたくべく  
涙のごひ今われら  
澄みて燃え立つ

いざさらば  
いざさらば 弟よ彰よ  
とこしへに うからどち まちてしあれば  
また帰り来よ 声はなくとも

昭和十九年五月二十五日 姉

兄は南の島で、玉砕したのです。戦う戦艦も、航空機も、武器もなく、戦うべきものも持たずに、玉砕したのです！！

そうなることは、始めから分かっていたのに、海軍は南方に、無謀に展開しました。自殺行為と分かっていたながら！！

なんと、人の命が軽んじられていたことか、その為に、尊い若い命を犠牲にして、軍は、為政者は、顧みることもなかったのです。

神がかりな偽装で国民を巻き込み、終戦の時を遅らせてしまったのです。

国民は、残された老人や、婦女子は、あり得ないと知りながら、神風の吹くことを信じたいと思いました。

他に頼るべき、何ものも、夢も、食糧さえありませんでしたから、真面目に、そう祈ったのです。

悲しみの中で昂揚する年若い女性の心根が、姉の心情が、痛まし過ぎます。戦争のお化けが、おぞましすぎます。

それでも、充ち溢れる弟への愛情を、姉の思いを。

72年という年月を越え、わたしは、今、目の前にしています！！

兄も受け取ってくれたでしょうか？

兄ぜみが、我が家を訪問してくれた夜中、海から汽笛でも聞こえたのでしょうか？

上空を旅客機でも飛んだのでしょうか？ 兄ぜみは下翅を中央に押し立て、上翅を横に拡げ、小鳥ほどに大きくなってブーブーと唸り声をあげつづけていました！！

せみがブーブーという声を、音を、本当に出すことを、始めて知りました。まさに、ブーイングです。

兄は最期にあって、どんな恐ろしい思いをしたのでしょうか？ それは、察するに余りあるものです。

——ここには、怖い人なんて、何処にもいないのですよ。ここには、怖いものなんて何にもないので……。

と、わたしは必死で話続けました。

兄ぜみは安心したように、少しだけ小さくなりました。

外に向かって差し出した、わたしの掌の上で、兄ぜみは手肢を引っ込め丸くなって、ここに残りたいと意思表示をしました。ここに残ることを選択したのです。

あれから、何年経ったのでしょうか？ 収めきれないでいた下翅は折れてしまい、上翅は他のせみよりも、角度をもって広がっています。

多分、兄は、想像を絶する恐怖を経験したのに違いありません！！

兄は、戦争の間違いを最期まで、叫び続けていたのでしょうか？

その兄に捧げる永別の詩でした。何故、今という時にこの詩に辿りついたのか？ ここから、視点をそらしてはならないと、兄は、姉は、杏リリイは、わたしの家族は言いたいのでしょうか？

人間という動物は、どんなに好戦的な生き物であることか！！

現在の世界の状態を見れば分かります。各国で戦争が起き、各国で殺し合いがおこなわれ、各国で難民が生まれ、怒濤のように、他国に押し寄せ、他国の安泰を侵害しつつあります。

大戦中にも似た不幸が、なお、世界に、この国にも降りかかって来ると、降りかかっていると、言うのでしょうか？

わたしの家族は、どのような戦争の芽も、摘みとっておかなければならないと、警告を発しているのでしょうか？

何故、今と言う時に、72年を経て、わたしは、永別の詩に出会うことになったのでしょうか？

どうしたらよいのか、見当もつかないまま、わたしは、握りしめていた姉の手紙を、伸ばすと、長い間、抱きしめていました。



美しい人へ！！（２０１６．１１．７）

——３０日頃からって？ わたしがお電話した日じゃないの？ ああ、きつと、わたしは拒否されたのだわ！！

彼女が素早く反応しました。

彼女に言われて、はじめて、わたしは１０月３０日を意識しました。

それまで、気付かなかったのです。漫然と月末になって、何故、わたしの家族が豹変したのか、分からぬまま、彼女の訪問を前に、何とかしなければと焦っていたのでした。

１１月７日、どのように呼びかけても、わたしの、「不思議な家族」は無反応で、もう、そこにはいないと、信じられました。

彼女のいうように、彼女の訪問の決定がその原因だったのでしょうか？ わたしの家族が、他人に対して身を護ろうとするのを、わたしは知っていました。

それとも、不穏な世界情勢が原因だったのでしょうか？ 永別の詩は、何だったのでしょうか？ 真相は不明のまま、時が過ぎていきました。

招待しながら、その意味が無くなったとは、口が裂けても言えませんでした。あなたの「話し相手」は、わたしの「不思議な家族」は、もう此処には、いなくなりました、などと、言える筈がありません。

兎に角、どのように虚勢を張っても、実態を見てもらうほか、方法は見当たりませんでした。

彼女を迎えて、わたしは待機するように、じっと息を潜めていました。

——これって、本物なんですか？

彼女は始めて見る、１匹のツクツクボウシと、７匹のアブラゼミと、１匹のコガネ虫の姿に、驚きの声をあげました。

わたしが確かめようとして、目を見張ると、目は頭の奥へ、奥へと穴をくぐるように後退していきます。どうしたのでしょうか？

さっきまで、確か、感覚としては、目は浮き上がっていたのに？

わたしの「不思議な家族」の透き通っていた薄羽は、美しかったベージュ色の翅は、それぞれの時を経て、残酷に衰退し、糊と絵具で繕って、

漸く原型を止どめていました。

この不毛な努力と、恥の気分！！

彼女は一匹一匹、丁寧に観察しているようでした。

わたしは、我が身を、他人の視線に晒しているような感じで、躰をすくめていました。

まるで、一人でこの世に投げ出されたようでした。「不思議な家族」の不在で、バックボーンを失ってしまったようで、なんとも心もとなくて、自分を持て余していました。でも、敵というわけではないのですから、自然体でいよう、そう自分に言い聞かせました。

もしかしたら、わたしの家族も、優しい美しい客人に気を許して帰って来てくれるかもしれないのですから？

——わたしには、毎日、毎日、生きるために、8枚の緑色の葉っぱが必要なんです！！

彼女は無言でした。

——わたしは、生きるために、死から身を護らなければなりません。あなたに分かるでしょうか？ それなのに、わたしの回りには、不死身の生があることを。それは、心と置き換えても、魂と置き換えてもいいんですけど……。

彼女は無言でした。

——はじめは、この家で死んだために残ったせみと、わたしの外に差し出した掌の上で、飛んで行くことを拒否し、此処に残ることを選択したせみの為に、毎日、ペチュニアの花に露を含ませ、それぞれの頭部に置くことが、習慣になっていました。それなのに、このマンションが大規模修繕に入ってから、花が育たなくなり、工事が終わっても花はすぐに枯れてしまいました。以来、緑色の葉っぱが、彼らの、いや、わたしの生命を繋いで来たのです。

——ああ、それで……。彼女の視線が動きました。

——ですから、緑色の葉っぱを獲得するためには、わたし、盗人も、殺人もいとわない。そんな決心でいるんですよ。

——ああ、それで！！ 葉っぱが何と、美しいと、そう思っていたところですよ。

わたしのこけおどしにも屈せず、彼女はおおらかでした。

——で、せみはこの葉っぱを食べるんですか？

——たぶん？

——わからないんですか？

——ええ、食べた証拠はありません。けど、朝、緑の葉は、ちよりちよりに乾燥して、せみを包み込んでいるんです。それが、何よりの証拠ではないかと？ そう思ったんですけど？

——それは、少なくとも、水分を摂っている証拠ですものね。普通に葉っぱを放置しておいたとして、どのように変化するものなのかしら？

彼女は、振り返ると、始めてわたしを見ました。

——柔らかく萎えた程度に変化するのが、普通でした。何度か試みてはみたんですよ。その結果、この結論に達したんです。

——そう、なら、盗人も、殺人もいとわなくていい！！

彼女は、屈託のない笑い声をあげました。

——わたしね、前に、あなたの後をつけたことがあるんですよ。本を抱えてゴミの集積所に入っていかれるのを。そして、ああ、こんなむつかしい本を読んでいらっしゃるのかと、そう思ったんです。

思いがけない率直さが、心棒を失ったわたしを救いあげるのを感じました。そこで、現実に戻りました。急がなければ、介護をしている彼女に許される時間は限られている筈です。

——わたしね、思うんですよ、ある程度の年齢が過ぎたら、国は、死に方について、個々の選択について、協力を惜しまない、そうあって欲しいと。象が身を隠して死に向かうように、静かに！！それが、老人の医療費に悩む国にとっても、利益があるとなれば、バンバンザイじゃないかと？

わたしは、唐突に、持論を展開しました。96歳の母親を介護中の彼女が、どう反応するのか、聞いてみたかったのです。

——あら、それって、尊厳死のことでしょう？ 国の支配下に入るのは困りますけど、犯罪になるのも困るんですよね。

余りにも的確な返答に、わたしは戸惑っていました。

——もう、その選択も自分では出来なくなった母を介護していると、そう思われてなりません。毎日、薬を飲んだ、飲まないで、喧嘩しているんですよ。そんなとき、人間の心が生き続けているという、あなたの話に乗って見ようと思ったんです！！

言って彼女は、目を合わせたまま、頷きました。

わたしは、どの程度まで、彼女に話したのか、覚えていません。

それは、マンションの自治会総会、席上のことでしたから。

始めに、「耳はいいですか？」と、尋ねたような気がします。そして、「聞いて欲しいものがある……」と、「動物かなにかですか？」と言う問いが、彼女から返ってきたのを覚えています。それに対してわたしが何と答えたのか、記憶がありません。

彼女はそんな風に、わたしから聞き取ったのでしょうか？

それとも、彼女は、そう感じ取ったのでしょうか？

彼女は、かなり正しく理解しているようでした。彼女の会話は、ただの美しい女ではないことを示していました。

気づくと、わたしは、「不思議な、不思議な夏！！」について、かなり誠実に話しているようでした。

客は、否定も、反論もしません。

わたしは、ツクツクボウシの宝石箱を取り上げると、本題に入り、モーツァルトの、ピアノソナタ第11番、第3楽章を歌いました。

どんな時でも、いち早く、助けの手を差し伸べてくれたツクツクボウシの姉を、一番先に取り上げたのです。矢張り無反応でした！！

祈るような思いで、繰り返しの部分を、何度も、何度も執拗に歌いました。

わたしがどんなにあせっても、どのような歌声も、返っては来ませんでした。

不在だと知りながら、次々にせみを変えて繰り返す無謀さは、粗雑さは、わたしの家族に対する侮辱、反逆、犯罪そのものです。

彼女は、その間、聴き取ったリズムを正確に、穏やかに、ハミングし

ていました。

わたしは、黙って、せみの乗っている箱を彼女に渡し、コーヒーを入れて来るからと言って、席をたちました。

リビングから、始めて聞く、彼女の優しい歌声が聞こえています。

彼女は誠実に、順番に、歌っているようでした。

お茶の用意をして部屋に戻ると、彼女は首を振って、持っているせみの乗った箱を差出しました。

わたしは無言で引き取りました。

これで、長い間のわたしの懸案は、答えを得たのでしょうか？

やはりそれは、わたしの幻想として、処理されるべきものだったのでしょうか？

血縁のものにしか、確かめようのないものだったのでしょうか？

それとも、まだ、その舞台に上がってもいけないのでしょうか？

——これは、お迎え現象なのではないかと、思ってもみたんですよ。

わたしは、收拾のつかない難題を取めるように言っていました。

——それは、違います！！ そんなに何年も、お迎えの為に道草を食うほど、霊も暇ではありませんでしょう！！

彼女は冷静そのもの。

——それも、そうですね！！

そこで、二人は始めて、堪えていた笑いを爆発させました。涙がでました。

それからは、故郷の思い出に花が咲いて、時間が過ぎました。

——からすとんぼが、つーい、つーいと、水面をかすめると、下にいた金魚が驚いて、赤い光になって穴にかくれました。あれは、すぐこの間のことです！！

彼女は夢見るように話していました。

——あれ、それって、わたしの家の瓢箪池のできごとでは？

——そうなんですか？ そうでしたか？ なら、あなたも腰をぬかしそうな、しゃけの大群をみたことも、アユの大群をみたこともあったのですか？

——ええ、ありましたわ、でも、家に帰って、網を持って帰る頃には、川には、魚一匹、姿を見せませんでした。同じですか？ あなたの故郷と？ そう？ 本当に！！

——となると、故郷像は、一般化されたのかしら？

——まさか？

ようしゃなく、時間はやって来ました。彼女は答えを伝えなければならぬと思ったようです。一度息を吸い込むと、静かな声で話し始めました。

——わたしの感覚では、ご家族はお留守のようでしたわ。多分、それは、あなたの感受性のせいではないかと。ご家族もそんなあなたを力づけるために帰ってこられたのではないかしら。多分、きっと！！

彼女は優しげな微笑みを浮かべて、わたしを見つめました。

——また、何時か、皆様の、ご機嫌の良い時に呼んで下さい。楽しみにしていますから。

こうして、優しい美しい人は、お母さまのもとに帰って行きました。先の見えない介護の苦痛など、微塵もにじませることもなく。

——お約束します。また、何時か、きっと！！

同窓会誌（2017. 1. 15）

不思議な家族と共に在って、この間まで、わたしが、どんなに幸せであったかを反芻しています。

それは、暖かい霧に包まれているようで、  
それは、涙に濡れているようで、  
それは、メッチャクッチャな、冒険のようで、  
それは、秘められた犯罪のようで、  
それは、崇高な魂の共演のようで……。

それなのに、今、わたしは、独りぼっちで、様変わりした現実と向き合っています。

心の、魂の抜け出ていった、せみの亡骸を数えてみます。

1匹のツクツクボウシと、7匹のアブラゼミと、1匹のコガネ虫の計9匹、数に誤りはないようです。

わたしには、今迄と同じに見えても、何かが違うことが分かって来ます。

それは、重量！！ 多分重量！！ 心の、魂の重量！！ が失われたのだと言うことが？

せみたちは、わたしの手に触れると、ふわふわと、浮き上がり、覗き込むと、その瞳に輝きはなく、躰全体に、おりのような年月を纏っていることが、分かって来ます。

心の、魂の不在の家は、一目瞭然なもの。

わたしの家族は何処にってしまったのでしょうか？

どうしたら、彼らにまた、出会うことができるのでしょうか？

考えあぐねた、わたしは、たった一つ的手段として、今迄の日常を、継続することを選択しました。

まるで、彼らの不在に気が付いていないとでも言うように。

こうして、わたしの日常は2ヶ月を経て元に戻りました。

心を込めて、せみたちに話かけます、歌います。

反応はなくとも、心を込めて歌いあげます。

そのほかに、どんな名案も浮かんで来ませんでしたから。

取り残された、わたしは、わが人生の先が読めるようになったらしく、身辺整理は急ピッチに進行しました。

あとは、全て廃棄ときめ、目を閉じて、最期に残っている書類をカッターにかけました。

母から兄へ、父から兄へ、兄から母へ、兄から父へ、姉から兄へ、兄から姉へ、杏リイから兄へ、わたしから兄へ。母から兄へ、母から兄へ、母から兄へ……父から兄へ。

海軍省から送られてきた兄の遺品です。

どんなに惨くとも、わたしの他に、古い手紙を、見ようとする人など、この世に、金輪際いないことだけは、信じられましたから。

あとは、不透明なゴミ袋に詰め込んで、袋を閉じようとして、息を止めました。

何か引搔かっています！！

古色蒼然としたその冊子には、同窓会誌とありました。大正十四年発行です。開くと、なんと母の寄稿がありました。表題は、「早く逝った、わが子へ」と。

#### 早く逝った、わが子へ

松林に続く菜の花畑を眺めながら、わたしは、青空に向かって天女のように舞い上ります。

名も知らぬ花々の咲き乱れる中に、わが子はいました。坊やはいました。天使のような姿で、笑っています。

走り寄って抱き上げたいと、焦っても、わたしは、わが子に近づくことも許されません。

わたしが何をしたと、神様はおっしゃるのでせう？

わたしは、罪人？

わたしは追い払われ、気が付くと地上にいました。

諦め、そんな言葉は、わたしにはありません。

待つてゐる、何時までも、何時までも、待つてゐる。どんなに待ち遠しくとも、あなたに会える日を待つてゐる。その日は必ずやって来るのですから。

わたしは、その日を待ち続けます。

そんなとき、「カちゃんが、じじに抱かれて、わたしを『お姉ちゃん』と呼んで、笑ったよ！！」とあなたの姉さんは教えてくれました。わたしの坊やは、話せるようになったのですね。



どうぞ、お祖父さまに可愛がってもらって、待っていて下さい。  
この世には、七十二日の短い生涯ではあっても、母の無智や、不注意がその原因であったとしても、母さんを、どうぞ、恨まないで下さい。  
きりきりと、錐でもまれる様な胸の痛みを耐えているのですから。

思へば、去年の十一月三日、この世に生れ出たあなたは、どんなに、前途を祝福されたことせう。  
この日は、明治の天長節でしたもの。あなたの父母の喜びは此の上ないものでした。

あなたの光る瞳と、体には、無限の力が感じられました。  
「力」と名付けました。  
父さまは「力」という論文を書きました。あなたの誕生を記念する為です。  
ああ、併し、記念は記念でも、何の記念になったのでせう。  
兄弟三人、同じ年に子供を持つと、一番後の子は育たない、と言われて来ました。  
鉢を割れば鉢が身代わりに立って、その子は長生きするとか？  
つまらない迷信とは知りながら、お祖母さまは、「鉢や鉢、どうぞ、力坊の身代わりに立っておくれ。カチーン！！」と言って鉢を割りました。  
その音を聞いて、みんなで、ほっとしたものです。

あんなに、太って、丈夫で、力強そうだったあなたが、こんなにも早く逝くなどと、神ならぬ身の知る由もなく、あなたの将来を思い描いては、微笑んだ、あの頃は、何と幸福でしたせう。

小学2年生を筆頭に、あなたと二つ違いの兄さんまで、手の掛かる子供の母であるわたしは、家庭の仕事だけでも易くないのに、教務があり、殊に、婦女界の裁縫講習などで、鉢が幾つあっても足りなかったのです。

本当にあなたは可哀想でした。あなたの姉さんや、兄さんの眠った後、心ゆくまで、可愛い、可愛いあなたを抱きしめるとき、何時も涙ぐましくなるのでした。

それでも、あなたを抱く時間の少しでも多い様にと、務めたつもりで

した。

でもやっぱり、母さんは愚かでした。どうか許して下さい。  
母さんの罪を許して下さい！！

風邪気味で熱のあったあなたを、お手伝いと、子守にまかせて、出勤してしまっただけですから……。

どうか、許して下さい。  
どんなに悔いても、あなたは、もう、戻っては来ません。

あなたを愛してくれた大きい姉さんが、童謡を書きました。

### カちゃん

かわいい、かわいい、カちゃん。  
どこへ行くの、カちゃん。  
かわいい、かわいい、カちゃん。  
にっこり笑って死んでった。

こんな、さあむい冬中に、  
白いきものを一枚で、  
さむい雪中こしてった。

ちらちら、花のさくころは、  
うでいっぱいの花たばを、  
かわいい、カに、あげませう。

と、歌ったのは、あなたが逝いて間もなくでした。  
やっと、二年生になった、あなたの姉さんは、忙しい母さんになっちゃって、あなたを、見護っていてくれたのです。小さな胸を震わせて、どんなに悲しんだ事だせう。

### カちゃん その2

さいのかわらの、おじぞうさま、

どうか、力をごくらくへ、  
やって下さいねがいます。

わたしは、よい子にしますから、  
どうか、カちゃんを、ごくらくへ、  
して下さい、おねがいよ。

これは、少し、あとで作った童謡でした。賽の河原のお話など、何処で聞いて来ましたやら……。

遠くなるほど、近づくといいますが、本当にあなたの姿が見えなくなって、あなたは、今、私達の胸で生きてゐるのです。

家中揃って、あなたを中心に暮らしてゐます。

仏壇には皆の心尽くしの色々のものが、並んでゐます。姉さん達は、絵でも、童謡でも、お清書でも、第一番にあなたに、見てもらうのを楽しんでいます。

どんなつまらない玩具でも、あなたにも買ってやらなければ、気のすまぬ小さな兄さんまで、仏壇のお水を換えてやろうとしてゐます。

父さまは、お経の研究を始められ、読経も上手におなりでした。

母さんもお経を上げます。お経の声は、あなたの声のような気がします。

こうして、あなたの遺骨は九十九日に、お墓に収めました。

冷たい土に返したことを思うと、熱鉄の玉のようなものが咽元まで込み上げてきます。

でも、どんなに哀しくとも、寂しくとも、もう、母さんは泣きません。母さんが泣けば、家中が暗くなって終います。

母さんは、このさき、あなたの姉さんや、兄さんを教育するために、自覚して、よい生活環境をつくらなければなりません。

姉さんや兄さん達の、長所と才能を、伸ばしてやらなければならないのです。

どうか、弱い母さんの心に、何時も力を与えて下さい。これからも母さんが暖かい母さんであるように守って下さい。

母さんは、あなたに会える日を楽しみに、真剣に務めてゆきませう。

あなたに会える日を楽しみに……。

では、可愛いカ坊や、楽しく遊んでいらっしやいよ！！

大正14. 4. 25 母

地上から、貴重な過去が失われる寸前、母は魔法の手で、わが子を救い上げたのでしょうか？ または、杏リリイが？

カーテンに取りついていて、薄幸な兄も、これを見て自分が愛された存在であったことを、確認できたのでしょうか？

一番上の姉も、童謡の天才少女の片りんを、見せることが出来たのでしょうか？

## 第6部

ツクツクボウシの娘（2017. 11. 15）

そして、秋、確実に、何人かが死に、何人かが生まれている夜は、天空に月をおいて、静まっていました。

いよいよ、明日！！

——ほーら、見て、見て、見て！！ 月が綺麗に昇りました！！

わたしは、「不思議な家族」を順番に箱ごと持ち上げます。箱から、バイブレーションは、伝わってくるのでしょうか！！

——チャ、チャ、チャチャチャチャ

反応は、返って来ます。せみたちは、生きていました！！

——チャ、チャ、チャチャ

せみたちの丸い目は、月を映して、きらきら光っています。

不思議な家族の、鼓動が聞こえて来るようです。

——明日、あなたの娘が、やって来ますよ！！ 嬉しいの？ そう！！  
よかったこと！！

わたしは、ツクツクボウシの楕円形の宝石箱を手に、ほっと胸を撫で下ろしました。ツクツクボウシが、身を振ったような気がしました。

笑ったのでしょうか？

秋なのに、何ともいえない、温くんだ、もやが、ベールみたいに、わたしと、「不思議な家族」を、包み込んでいきます。

もししたら、みんなも、この日を、待ちかねていたのでしょうか？

月は、子供の頃から、何時もわたしの味方でした！！

柔らかい、暖かい風、幸福の予感！！

もうすぐ、我が家に、青い朝が、やって来ます。

肉親であることの安心感が、わたしに張りついていた不安を、いとも簡単に、払拭してくれます。

——そのことが、どんなにうれしいか。大丈夫よ！！ 少年、タロには、はっきりと、聞えたのですから。二度聞きとって、『ほんとだよ、ほんとに聞えるよ、ママ！！』と、そう、叫んだのですから……。

今迄は、まだ、幼い少年の発言として、除外してきました。

それは、少年を巻き込むのは、フェアでは、ないと、自戒してきたからです。

でも、今、わたしには、少年の反応だからこそ信じられるのだと、そう思われてなりません。

このマンションの階下に住む、美しいひとを、わたしの「不思議な家

族」は、拒絶しました。

目的は、今回と同じ、わたしの、「不思議な家族」の声を、その人が、捉えることが出来るかどうかを、試すためでした。

試す？ それで、気にさわったのでしょうか？ 誰が？ どっちの？

わたしが、歌った時と、その人が歌った時とに。

血縁のない人に、果たして、せみたちの声が聞こえるのかどうか？

偶然というには、あまりにも、多すぎる偶然のなかで、わたしは、そのことに拘り続けて来ました。

10年！！そうです、10年！！

あとは、血縁の大人に、聞いてみるのが、残っていました。その日が明日！！

わたしは、前回のように、彼女たちの訪問を隠したりは、しませんでした。

みんな、その日を楽しみにしているようです。それが、驚きでした。

こんなにも、違うものかと？

2017年11月7日、彼女たちはやって来ました。

この物語の最後に、せみの声は、晴れて、確認され、わたしの異常や妄想では、ないことが、証明されるのでしょうか！！

10年ぶりに見る、ツクツクボウシの娘は、ロシアのモナリザ、「忘れ得ぬひと」に似た、もの憂げな目をあげて、わたしを見ました。

見る間に、10年の日々が、飛び去っていきます。

その娘も、「外交官」の、愛称に、ふさわしい、くったくのなさで微笑んでいました。

彼女は、メガネをかけていましたから。子供の頃の面影はありませんでした。長身の好ましい、近代女性に変身していました。

何よりも、ほんと出来たのは、わたしの、わたしの家族の、神経にさ

わるようなものを、この二人が、持っていないことでした。

彼女たちと、最後に出会ったのは、「杏リリイをしのぶ会」の席上でした。その後訪問したいと言う、彼女の願いを、わたしは、故意に遅らせてきました。

それからの、10年の日々が、いとも簡単に、飛び去っていくのを、わたしは見ました。

わたしの家族が、他人に対して身を護ろうとするのを、わたしは知っています。

でも、今、不思議な家族は、手放しで、二人を受け入れようと、構えていました。これなら安心です！！

——あら、大丈夫じゃない、もっと、ひどくなってしまったのかと思っていたけど？

ツクツクボウシの娘が、杏リリイの遺影の前に並んでいる「不思議な家族」を、順番に点検でもするように、見ながら言いました。

——そんなことない！！ みんな、もっと、もっと、しっかりしていたのだから。糊と、絵具で、何とか持ちこたえているのよ。ツクツクボウシに、いたっては、それも、出来なくなってしまうって……。

二人は、小指ほどになった、小さなせみを、じっと見つめていました。

——ツクツクボウシは、本当に、美しいせみだったのよ。ホームページの写真は、見てくれたかしら？ 透き通った翅には、赤い線の入った美しい縁取りがあって、もっと、大きくて、それは、うっとりするほど、綺麗だったのだから！！ 東北地震の時には、東京にあっても、投げ出されて……。ごめんなさいね、お二人には、こんな、可哀想な姿を見せることになってしまった！！

彼女たちは、無言で、それを見ていました。

やおら、ツクツクボウシに、顔を近づけたツクツクボウシの娘が、何かつぶやきました。

わたしには、聞き取れませんでした。何を言ったのでしょうか？

彼女たちの感傷に付き合っている時間は、もう、ありませんでした。  
わたしは、本題に入りました。

——それで、あなたたちに、願いがあるの。この、わたしの「不思議な家族」が、本当に、歌うのか？ または、話すように、せみ特有の鳴き声を、果たして出しているのか？ 確かめて欲しいのよ！！

二人が、不安そうな顔を見合わせたのが、わかりました。躰をすくめたようにも？

わたしは、安心させるために、つけ加えました。

——正直にいつてくれて、いいのよ。ただ、始めから、否定して、かかるのではなくて、もしかしたら、そんなことだって、あるのかも知れないと、そんな、軽い気持ちで、聞いてみて下さる！！

わたしは、寛大そうに言うと、モーツァルトのピアノソナタを、歌っていました。小さいけれど「……ティラ、ララララ、ララ、ティラララ」と、後のフレーズを引き取って、嬉々として歌う、せみたちの声が、はずんでいました。

これなら、大丈夫なようです。何度か繰り返しては、彼女たちの耳元にそっと、もっていきました。

——ねえっ！！ ちょっと、早まったり、遅くれをとったりは、するけど、ほら、聞えるでしょう！！

二人は首を振っています。

——何故？ これが聞えないの！！

わたしは、安心していただけ、舞い上がっていました。

何故、わからない。こんなに、みんなが、歌っているのに、話したがっているのに！！



——歌が無理なら、何でも、話しかけて見て下さる。せみ特有の、ジ、ジとか、チャ、チャとか、チ、チとか、そんな風な音で応えてくれますから。それは、決して、人間の出せない音です。せみの、いや、昆虫の出す音に似ているのかもしれませんが……。

彼女たちが、自由に話せるように、わたしは、しばらく、リビングから出て、ダイニングで、お茶の用意をすることにしました。

リビングルームから、彼女たちの歌声や、話声がしてきました。美しい旋律は、若い娘のものです。なんだか、期待がふくらんでいくようでした。

わたしは、満面に笑みを浮かべて、リビングに戻りました。

——わたし、拒絶されたのよ、わたしの母に！！  
彼女が、つぶやいていました。

わたしは、ツクツクボウシの娘を改めて見て、驚愕しました。

——なあに、その箱の持ち方は？ まるで、恐る恐る、持ってでもいるように？ 箱を躰から、そんなに、遠うぎけて？ 何か異物でも見るように、何かを嗅ぎ取ろうとでもしているみたいに？ こんどは、四方、八方から、のぞきこんだりして？ 何を考えているのよ？

——それでは、だめです！！ もっともっと、心に寄せて！！ 心を寄せて！！  
わたしは、叫んでいました。

——そんな、信じていない仮面をつけて、心を遠くにおいていては……。みんなの、声が聞こえる筈じゃないの。もっと、顔をよせて！！ 耳をすませて！！ ほら、聞えるじゃない！！ つばなんて飛んだって、涎なんてでたって、そんなことはどうでもいいのよ！！ 大切なのは、聞く気があるか、どうかってことなのだから！！

彼女は、まるで、何かに憑れたように？  
ぼうーっと宙を見つめていました。

驚いたことに、わたしの叫びは、声は、彼女たちには、聞えては、いないようでした！！

ああ、その途端、わたしは、理解しました。  
これが、解答なのだと！！

聞こえない。それが答えなのだと！！ 彼女には、「不思議な家族」の声だけではなく、わたし自身の声も、聞こえては、いないことが！！

落ち着くのよ、これが、現実。  
彼女たちには、聞こえていないのだから……。

——ありがとう！！ 疲れたでしょう？ もう、いい！！ お茶にしましょう！！  
わたしは、事態を転換させました。

気にすることはない、こんな、時が、来るのではないか、という危惧を、恐怖を、漠然と持ち続けて来たのですから……。

気持ちを静めて、そう、ごく自然に、そう！！  
彼女たちが悪いのではない。悪いのは、拘り過ぎたわたし！！

失望は、彼女たちにも伝わって、いるようでした。  
ツクツクボウシの娘が、目をあげました。

——失望しているのは、あなただけでは、ないわ！！ あなたにそれが、わかるかしら？ わたしは、拒絶されたのよ。この、マンションの美しいひとのように。しかも、わたしは、わたしの母に、拒絶されたんです！！  
わかります？ 誰よりも、愛してきた、愛されていたと、思ってきた母に、拒絶されたのよ！！

——それは、ない！！ そんなことは、ないのよ。もともと、そんなことは、なかった、と。これで証明できたのだから……。

わたしは、必死で、彼女を鎮静させようと、あせっていました。

——いいえ、わたしは、怖かったの。あなたには、母の声が、そんなに聞こえているのに、そんなに、楽しく歌うことが出来るのに！！ わたしには聞こえない！！ それが、我慢できなかったわ。羨ましくもあったし、恨めしくもあった。だから、ああ、きっと、わたしは、拒否されるに違いない、と、始めから、そう思ってしまったのかもしれない。下の階の人の話は、何度も、ネットで、読んでいたから。わたしも、彼女と同じに、拒絶される運命にあると、そう信じてしまったのかも。……何度か、それを訴えたのに、あなたは、それを、無視した！！

彼女が、ふーっと、溜息をつきました。

わたしは、仰天していました。

——だから、これが答えだと、思わないで欲しいのよ。この娘には、聞えたらしいもの！！

——ほんと！！

わたしは、驚いて、彼女の娘を見つめました。

メガネのなかで、目が笑っていました！！

気をつかってくれたのでしょうか？？

——でも、そんな、わたしにも、分かったことがあります。みんな、こんなに、大切にされて、幸せだなあって！！ わたしの母だって何故、わたしのところでは、なくて、ここなのかと、ずっと思ってきたけど、ここに来て、分かった気がするわ。ここにあって、こそなのだ！！

母親に拒絶されるかもしれない、恐怖が、どれほどのものなのか？

今考えれば、はじめから彼女は、その恐怖を呟いていたのに、伝えようとしていたのに、わたしは、それに気づかなかったのです。

ただ、自分の主張を通したいために？ なんとしても、他の人の同意が得たかったのです。何故って、わたしには聞こえていましたから。

こんなことになって、わたしの、「不思議な家族」は、何を思うのでしょうか？ そのことが気になりました。

——ここの、この雰囲気、何ともいえないのよね！！

彼女は、杏リリーの遺影の飾られた、テーブルの一角を、囲い込むように腕を拡げました。

いとおしくてたまらない、とでも言うように……。

振り向くと、いつの間にか、メガネを外した、ツクツクボウシの孫娘は、わたしを見ると、張りつめた瞼が、音をたてるかと、思われるような、瞬きをしました。

なんと、言っているのでしょうか？

何故か、わたしは、その意味を、聞こうとはしませんでした。怖かったのです。

今も、あの日の傷みは、残っています。暖かい日差しのなか、紫色の花の姿で！！

紫陽花（2017. 12. 7）

6月、故郷のわが家で、寄り付きの、正面、長方形の窓枠いっぱい、まるで額縁にはいった名画のように、咲き誇った紫陽花は、今、この家の玄関で、ただ一つ咲き続けています。

7月、8月、9月、そして12月、紫陽花は、何故か、今も咲き続けています。

この花は、マンションの中庭から手折って来た水分不足で萎れかかっていた、がく紫陽花でした。

水分を与えたら、生き返るのではないかと思われた一本は、咲くことも出来ずに短い一生を終わり、まだ緑色だった一本だけが、生き残り花を咲かせたのです。

今、中央の花蕊は、乾燥してはいますが、花は縮小も、衰えもみせず

咲き続けています。

この花は、大輪の、がく紫陽花で、形のよい肉厚な青紫の小花を風車状に並べ、それは、美しく咲き誇っていました。

生きてるように見えても、半年も過ぎれば、自然に、乾燥花になったのかと思い、水を換えてやったものか、どうかと、思案する日が続きました。

紺青の花器は、水を入れると重くて、台座から降ろすのも、持ち上げるのも、わたしの手に余るものでしたから、さし水でことをすませてきました。

そんなある日、決心して、水を換えようと持ち上げ、洗面台まで運ぼうとしたときです。

——シュ、シュ、シュシュ、シュシュシュシュッ！！

まるで、蒸気機関車みたいな音をたてて、紫陽花の茎が、立ち上がり、水面を白波を蹴立てて、走ったのです！！ 走ったといっても、10センチか、15センチくらいなものですが、わたしには、そう見えたのでした。

一瞬、何が起こったのか、それが何なのか、判断出来ませんでした。

水は満杯でした。短く切り込まれた枝の切り口は水面すれすれに沈んでいました。

わたしの持ち方が悪くて、水面が波だったのでしょうか？

わたしは、水をこぼさないようにと、花器をしっかりと抱え込んでいました。満杯の水面は、目の前でした。

——そう、嬉しかったの！！ そんなに？

息を継ぐことを忘れた、わたしの肺が硬直しています。怠慢が悔やまれ、丁寧に水をいれ換えると、もとに戻しました。

乾燥花になったのかも知れない、と思われた紫陽花は、奇声を発するほどに、新しい水を求めていたのでしょうか？

——そう、そんなに？ 新しい水が欲しかったの？

——パチ、パチパチ。

という小さな音が、花の中でしました！！ 思わず耳を押さえました。

——とうとう、花まで？

今度こそ、妄想だと、老化だと言われても、もう、反撃の余地はなさそうです。

わたしは、こんなことには、「不思議な家族」で慣れてはいましたが、過去を遡っても、花が話したなどと思ったことは、ありませんでした。

でも？ 次の瞬間、思い当たりました。

そこに、息を潜めて隠れているのは、杏リリイに違いないと！！ あの、好奇心に溢れた大きな目が笑っていました。

自由を手にいれた彼女は、わたしを驚かすためには、何だって、する気なのだ！！

日課の歌の時間は、これからでした。11月、寒くなって、玄関に一人ぼっちで置くのも可哀想に思われ、わたしは、紫陽花を仏壇前に移動させました。

そのとき、花の悲鳴が聞こえました。

「ああ、ごめんなさい！！」

わたしは慌てて、他の花に支えて貰う形で、そっと拾い上げた小花を一つ、リングを形成している花と花の間に挟み込みました。

花は形も崩さず、花器に顎をのせ、紺色の花器をバックにして、こんなにも、美しい紫陽花は、見たことがないと思わせます。

紫陽花は、やはり生きていますでしょうか？

よく見ると、水面に小さな泡が、浮いていました。

呼吸している証拠でしょうか？ 水を吸い込んでいる証明でしょうか？

枝が水から出ている時、わたしは慌ててさし水をします。

わたしが話しかけると、機嫌の良い時には、紫陽花の軸で、花をくるりと、回転させます。

それは、素早く、でも、静かに。わたしは、目の前で見ていながら、それが信じられなくて、次に回転してくれるまで、眼を凝らしつづけました。

すると、また、まぎれもなく風車のように、回転しました！！  
まるで、手品師みたいに？ 得意そうに。

小さな奇跡？ 日毎に、わたしと紫陽花の間には何かが、成立していくようでした。わたしが、わたしの深いところで、それをのぞみ、紫陽花がそれを受けとめるとき？

差し込んである小花を落とすこともなく、わたしから見れば時計回りに、器用に半回転させると、また左回りに半回転させ、元の姿ですまし返りました。

——ああ、凄い、凄い！！

わたしは、手品でも、囃す気分ではしゃいでいました。踊り踊って拍手しました！！

——パチ、パチ、パチ。

という音が、花の中から、返ってきました。

わたしの手も、口も、鼻も、花に触れてはいません。

風も吹いてはいません、外から伝わって来る響きもありませんでした。

それが、現実であることに、わたしは、当惑しきっていました。先日の、蒸気機関車のような音や、水上を走った現象と、花の回転には、類似の何かが、理屈があるのかもしれない。

四季の花々で脈打った、ふるさとの、あの窓枠も、あの部屋も、あの家も、もう、あそこにはありません。

ふるさとは、あの町には、もう、心臓がないのだと、紫陽花は言っていました。わたしたち家族には、このマンションのほか、帰る家は、ないのだと。そう言っていました？

——泣かないで！！

杏リリイは、紫陽花を風車のように回転させ、わたしを、慰めているつもりなのではないでしょうか？

わたしたちが、杏リリイとわたしが、ふるさとを捨てたのです！！

かくれんぼ（2017. 12. 10）

——リリイ！！ リリイ！！ あそぼー。  
——リリイ！！ リリイ！！ おはなし聞かせて。

昨日は、あんなに機嫌よく話してくれていたのに、今日、杏リリイの声は、いくら耳をそばたてても、聞えてはきませんでした。

何度、呼んでも、何度話かけても、彼女の声は返ってはきません。  
——ああ、わかった！！  
わたしは飛びあがりました。

——あなたは自由を手にして、あなたの名前を、百にも、千にもしたの  
でしょう？ わたしが、あなたを呼んでも、何回呼んでも、誰が、あなた  
を呼んでも、何回呼んでも、もう、決して返事をしないのね。あなたは、  
新しい名札を積み重ね「存在のエコー」の中に隠れたのでしょうか？

### 存在のエコー

……………わたしは、ソラという名前ひとつだけじゃ間にあわないわ。  
何億兆って名前が世界にあるのなら、百も千も名前をわたしの自由  
にかまわないはずよ。あなたは、わたしをいろんな名前と呼ぶの。

ここにいる状態のまま、男はやせ細ってなにもこたえず、すでに何もの  
にも取り囲まれず、何ものをも、とり囲めなくなってしまうている。

ほどよい風さえ、彼を何の抵抗もなく通り過ぎて、男の外側から、から  
みついたり、男の体のなかで、からみあったりはしない。

「あなたは、返事ができなくなったの。わたしが、名前を千にもするのと  
一緒に、あなたは、あなたの名前を消し去ったのね。わたしが、あなたを



呼んでも、何回呼んでも、誰があなたを呼んでも、何回呼んでも、決して返事をしないのね。出来ないはずよ。名前をなくした、あなたは、決して呼びかけられはしないのだから」

女は、男が呼びかけてくるのを待っている。呼びかけは、どんな名前であっても、女をさしているはずである。今後、女は千もの名において、二枚舌ならぬ千枚舌をつかって、一千種類もの、さまざまな相反することを言いつづけ、言ったことの数の多さを自慢するのだろうか。

女は、思い通りに千匹ものアマンジャクを飼いならす、むつかしい仕事をやり遂げられるのだろうか。

千もの名前をつけたら、彼女を呼ばない人からも、呼ばれつづける、わずらわしさに包囲されつづけるだろう。違う、他人を呼んでも、自分を呼びつづけ、返事と、呼びかけを一度にするという、孤独に墮ちこむことになるだろう。

男に話しかける。おかしなことに、話しかける言葉が、千もの意味に揺れ、女は男を侵すことも、救うことも、すでに、不可能になっている。

「わたしは首から上を、なくしたことがあったわ。足のないひとが、ない足を重く思ったり、走りもしないのに、走り疲れたり、かゆくってしょうがなくなったりするみたいに、結構、なくなった頭のなかで、いい考えが、浮かんんだり、ガンガン痛んだり、軽蔑したり、行動を命令したりするの。体の一部分をなくしたと同じように、名前をなくしたら、呼ばれるはずのない名前を呼ばれているような、幻覚に悩まされて、答えなくてもよい返事をしなければならぬ羽目におちいるのでしょうかね」

男は女の話し声など、聞いていることの何千分の一にしか感じないほど、呼ばれるはずのない名前を呼ばれつづけ、それを、さえぎる方法がなくなって、耳の内壁に爪のあとがつくほどに、指を押し込んで、いるのかも知れない。

「音には聞こえる範囲があるのだということを、忘れては駄目よ。ここなら、名前があっても、あなたは、わたしにしか呼ばれるはずがないのに……」

女は男と交わす会話を失っている。千も名前をまだ一つも、名づけな  
いまま、呼ばれないまま、高く積み重ね、一番上の名札にソラをおく。

「とりもどせるのよ。なくした名前を取りもどせるのよ」

女の話をしているものは、彼女以外に誰ひとりいないが、一番上の名札  
ではなく、まだ名づけられない名札に名づけられて、女は、いくつかの耳で聞い  
ていることに気づく。

千よりも、もっと多くの、わたしで構成されている星クズの不定形の尾を  
ひいている彗星、このわたしは、その尾の微細なかけらにすぎない。

頭の部分の、ひとつの光のつよい星、わたしの星クズのなかで、実体を有  
しているのはそれだけなのかも知れない。

そのわたしの核みたいなもの、それはいま、後姿だけを見せて、路面に進  
行する矢印をこぼしながら行く誰か。その尾にすぎないわたしは、つづいて  
いかざるを得ない。

合わせ鏡で後ろをみるに似た羞恥心が、少しずつ、わたしをとらえはじめ、  
絶えずある間隔をたもってきた、その後姿に近づき、あるいは引離される。

服の中が広すぎるためばかりでは、なさそうなのに、彼女のスカートの  
部分に、V字型のたるみが次第に大きくなる、自分のもののように気がか  
りな何段かのたるみ。わたしは、ためらったり、走ったり、ためらったり  
する。

すれちがう車体のそれぞれに、太陽が三コかがやいている。車の音が、  
近づくにつれて高くなり、遠ざかるにつれて低くなる現象に、つぎつぎ襲  
われつづけ、わたしは耳の位置を変えるために背伸びをするが、音は体  
をはみ出しているのだから、そこにもある。

彼女の後姿がすうっと消えたら……。すうっと消える波形の切れ目、街  
全体がかたむくと、わたしは足をはねあげて、空を踏み、空を海とみる。

水平線は何本も引かれているし、立て直そうと思わないうちに直立して  
しまった街並みがふるえるから、自分は、何処にいるのか、悲しいことに  
わかっている。

はじめて見る思いで、わたしはそこにある街並を眺めなおす。歳月の向こうから、ふたたび湧き出たような古びた家並がある。

粗暴にのびた庭木の枝のはみ出ている路地への曲がり角に、光で半分消されているが、いままで、後ろしか見せなかった彼女の横顔が見えている。わたしは、見えているものを洗い出すように、目を空気にさらしてみる。

彼女は、ハクボクで△を描き、▽を描き、○を描き、上下に二本ずつヒゲをかき、さらに、六角形で囲み、ギザギザを描き、一つのマークらしきものを描いていく。

腕全体を動かして長大な矢印を路地に曲げる。それが最後の矢印であるかのように。

空気をくぐって見えている横顔は、暗いまばゆさのような輪郭に包まれているが、片目と、突き出た鼻と唇が、こせこせと積み重なって見えるだけだ。

わたしは足をとめないで、矢印が描かれるのを、囲んで立つ中年女たちの後をかすめて、路地を曲がらずに進んでいる。横をみないで、巧みに彼女たちの視線をはずし、真っ直ぐに突破し、よくわからないうちに進んでいく、仮定の点線を抜け出してしまおう！！

軌道はずした場合、みんなそうなるように、わたしはほとんど、転ばんばかりに止まり、実に短い一瞬だけ、つまり珍しい位置、膝と膝の間から遠望するかたちで、見た一瞬だけ、ハクボクのマークの矢印にほとんど接するところに、水たまりに写った自分の顔のような具合に、その女性を正面から、ちらりとみる。

その顔は初対面であるし、じつに短い特殊な瞬間であったから、当然のように、つぎの一瞬、忘れ去って、自分との類似をキャッチし検討すべきときがあったとは信じにくくなっている。

わたしは鈍感になってしまったなと思う。もう、前方に観察し、つけ狙うべき、目標はひとつもありはしない。

目標がなくなっていることは、見えて来るものに対する、反射である敏感さを失っているのだ。

前方は空白であると同時に、視線のない、すさまじく本質的なもので固

まっっており、命がないようでもある。だから、なりゆきまかせ、いきあたりばったりの、わたしの行動をはね返す。

……わたしはこうも変化のない状態にじりじりして、こちらに注意をひきつける何の口実も持たないのに、呼んでみる。呼ぶ名は一種類しかなく、「ソラ」と呼んでしまう。

こころみでもなければ、無分別でもなく、ごく自然なことであるらしい。ソラと呼ぶと、まるでその女性とわたしが、それだけの貧しい関係でしかなかったように、一秒ばかり横目でわたしを見る程度まで、顔を見せる。彼女の髪の毛先が、目尻に入っているようだ。

わたしは大急ぎで、さっき見た、かすれた横顔と、今みた横顔をつないでみる。

二つのちぎれた写真は、二人の別の人間の左右であるかのようにくいちがいが、つなぎとめる一センチの合致もみつけ出せない。

しかたなく、横顔を横顔のままとらえて、わたしはよく自分をだますときのやりかたで、その顔のモデルをさがす。Aに似かよってしまう。

少し減食によってやせさせ、ふけさせ、鼻の先に豆粒ほどの肉の丸みをつけ加える。似たものにするため、さまざまな操作でつけ加え、とりさり、その横顔をAにし、Aをその横顔にしてしまうことに到達すると、もう、わたしは自分をだますやりかたを、すっかりはぶいて、自分をだますことができってしまう。

——Aにそっくりじゃない、Aの妹のA'にも姉妹みたいに似ている。

わたしは、わたし自身を追いつめるかのような、この地点に来ていながら、いぜんとして、自分の顔を愛しつづけているように、または嫌悪しつづけているように、どこかにしまいこんで、くらべることを拒んでいるらしい。

拒んでいることによって、快くしているが、いつもと同じに、やや抜けていて、なんのために、一生懸命、自分の顔をしまいこんでいるのか、わからなくなっている。

カラなのを知らずに鳥かごから、鳥が飛び去らないように番をしているのに似て、いなくなっていて、とり出そうとしてさえ、取り出せないわたしの顔を、どこかにしまいこんでいる緊張にいるのだ。

はりつめていて、「Aそっくりじゃない！！」快活に笑って、Aに対する奇妙な誇りの感情を吹き出してしまうと、わたしの周囲も、体のなかも、すっかりカラになって、悲しみが呼び集められている。

わたしは道路の表皮の、ほんの上っ面において、その厚みのなかに、1ミリも侵入できないでいる。

自分に一番近いところにいながら、自分の厚みの見えないわたしが、立体感を欠いているのと同様に、わたしの見たあの横顔も、裏の白い紙切れの薄い一枚のまま、ひらひらしている。

紙きれにすぎない横顔を蘇生させるころみをはじめ。その横顔の裏と裏にノリをつけ、はりあわせ、左右合わさった顔に適度のふくらみを与え、息吹を与えなければならない。

体のうすいチョウチョウ魚科の熱帯魚が、水のなかで思う存分うるおいながら、泳ぐ。

——真正面から見なければならない。真正面から見る顔が、ほんとの顔なのだから……。

熱帯魚は、わたしに近づき、わたしから遠ざかり、左側面をみせ、右側面をみせ、左横顔と右横顔を交替に見せている。真正面からみる顔をとらえようと懸命になるが、線でしかなく、とらえようがない。

線にすぎない正面から見る顔に両眼と口があることを確かめようとする。

……………河原には無数の石がある。女は自分の何倍も重い石の上にいる。どの石も、ちらちらと光をだましながら、ずっと前からその位置を保ったままだ。女が石の上を飛び歩くと、足裏は一步ごとに温度と滑らかさが加わり、しみてくる痛みもある。

突き出した風が、石のくぼみの曲線を引き伸ばし、一つのコブをこえて、割れた石のギザギザの側面にぶつかり、空気の渦を消さずに動いていく。

逃げてしまうために、もがいて、全部の石は、光とごちゃまぜになるが、もう一度、静かに女の視野につめこまれる……………。

……………無数の石は、女自身の頭部、あるいはいろんな人物の胴、さらにその部品であるバラバラの目耳口等だ。

「そこにそうしている必要はないわ、耳を踏んでいく足があっていいし、目玉をつかんでばらまいていく手があり、ころがって足をさらっていく胴

があってもかまわない……」

女が男に話している。

「とりはずされて、ばらまかされている、おびただしい人間の部品を前にして、わたしのものを探し出さなければならなかったの。目は魚群のように白い腹を見せて、耳は貝塚に捨てられた貝殻のように……かず限りなくあるから、似たようなものばかりで迷ってしまうと、思っていたのに、どの部品も、ものすごく違っていて、違いすぎるのが、これが、そうだという断定をさまたげているみたいなの。

一つの体のなかにつながれていて、何となくなじみあっているけど、一度何かの拍子に離れて投げ出されてしまえば、もっと、ぴったりと融けあった組み合わせに、磁力で引きあつたみたいに、つながってしまい、きっと、もとの通りの不確かなかわり合いで結合した体に戻るなんて、あり得ないのだろうとは、思っていたから。今迄の組み合わせのかくれた矛盾のために、もう一度わたしの体をつくりだすことが出来ない。というのならわかるけど。

だったら鼻、あるいはそれに近いもの、一つでいい、独立したものとして、探しだすことができよさそうなものなのに、不可能なの。

選り好みしている結果そうなるんだって、おっしゃりたいでしょうけど、女は、自然のたすけがあるみたいに、正確に見つけ出す力を持っているというわ。一番近いところで知っていて、保護し、変身を食い止めていた筈の自分ですもの、見えないなら掴みだすことが出来る筈だと思ったわ。

わたしは自分の骨の方から、たえず、判読しにくい顔を自分に示しながら、真剣に未知の部分の否定しながら、目玉一つでもいいから、見つけ出そうとしたのに、狂気のように探しても一コも見つけられなかったわ。

自分を確かに受け持っているのかどうか、粗雑に生きているものなのね」

「対立しているわけでもない体の部品をぶっつけあうから、そうなるのさ。忘れっちまったんなら、いつか見覚えのあるものになって現れるまで、のっぺらぼうの顔ですまして待てばよい。それが出来ないなら、体の部分にわかれたままでよいだろう。もとおりに顔を作り直すなんてことは、ともすると、何かに恨みを持って仕返しをするのに、似ているのかも知れない」

河原にたむろしている女たちの、なかば消えかかった輪の片隅で、男は自分をほめそやすように、傲慢な顔で話している。

「部品だけじゃ人間ではないわ。鼻の下に短い一本のひげみたいな、体がみじめな姿をさらしているとしても、それとわかる、人間らしいまとまりがなければ……」

男は立ち去ろうとしている。こっそり滑るように進んでいくことが出来、体じゅうを一緒に引き連れていくことに、苦勞もしていない……。

……わたしに連なる体節が這い進み、その最後の体節、今度は わたしの一番後ろになってしまった彼女。たぶん彼女からこぼれる白墨の矢印は、すでにわたしを導く仮定の点線ではなく、わたしが這進んだ証拠として残る足跡になり、属している一匹の足跡になってしまっている。

……それは、幼虫としてやがて羽化し、異性を誘う兆しの点線かもしれない。彼がこれをたどり、導かれてくる。

空中に彼の服がぶらさがったり、たたまれたり、投げ出されたり、そんなかたちで、こちらにくる。未来への時間的過程の一部の、そのまた一部を切り離して、肉体のない服だけの彼がまずくる……。

わたしは、お気に入りのくだりにくると、しおりをはさんで、「存在のエコー」を本棚にもどし、紫陽花に声をかけていました。

「お散歩にいきませんか？ いいお天気よ！！」と

快晴でした。太陽はかなり上に昇っています。わたしの影がヒールにくっついてきます。

払っても払っても、影は陽気についてきました。

「まさか、杏リリイが、わたしの影になったなんてこと、ないわよね？」

影が飛び跳ねたような気がしました。

影が走り出しました。

「おかしなひと！！ さっきまで、毛虫だったのに？」

すべての根源である、杏リリイは、今、背をたわめ、わたしの行く手で、長大な矢印を路地に曲げました。

それが最後の矢印だとでも言うように！！

たましいの季節！！（2017. 12. 15）

いま、たましいの季節。

「象徴の哲学」のなかで、哲学者、土田杏村は一冊の詩集を手し、広野をさまよいます。

今春なり。これ等春の歌。

早起薔薇と百合の、のぞみの歌。

わたしは、魅せられたように、父の遺品のなか、この本に出会いました。

わたしが、この本に出会うのは2度目のことです。1度目は、手術の為に入院中の、父の病室でのことでした。

父は眠っていました。何を読んでいるのだろうと、古びた本を手にとった時です。

「どう思った？」突然、父の声がしました。

わたしは、盗みの現場を咎められた子供のように、慌てて、本をもとに戻しました。

「まだ、後ろの方を、ちょっと読んだだけですから、でも、なんだか、凄一い。それに、大正8年発行なのに、ちっとも古くなっていない！！」

「そうか！！」

父は何だか嬉しそうでした。そんな気がしました。亡くなる半年前のことです。

詩人の名は分かりません。若い詩人という他には？ その詩人の詩も、哲学者の文章も、その時代には珍しく、口語調で、わたしに、今迄、これほどの感性に出会ったことはない！！と思わせるのでした。

わたしの「不思議な家族」は、「不思議な、不思議な夏！！」の最後に、この作品を選択したのでしょうか？それが、彼らの夢だともいうように。



## 象徴の哲学

……私は一冊の詩集を手にして広野のなかにさまよい出た。草は路傍に茂り、鳥は恋を囀っている。

空にはいっぱいの日が充ち溢れて、その余った雫は露のように、野原へ降って来る。私は大きな川に渡した橋の上に立った。

下に行く水を透かして水底の一石々々が、はっきりと見分けられる、水は流れ、石は輝く。私の乏しい心は最早その水の中にあった。その石の上にあった。其処には小さな藻が揺れ揺れて、下には小さな目高や蝦の子が群れているに相違なかった。

私はそれらの生き物と遊び戯れた。

上には水紋が大きく広がって微かな音楽を歌い、側に行く浪はいつも、私に愛を耳語して通り過ぎた。

私の心はもうもう、無上に嬉しくてたまらないので、小さな丸い石を台にしながら、その上で踊って踊って踊り抜いた。目高や蝦の子も私と同じ位にやっぱり幸福で、側の石の上で同じ風に踊っていた。

私は静かに空を見上げて、落ち散って来る光の雨を手にとりとりしながらか、また、野のなかを歩いて行った。やがて私は脇の下がぞくぞくし、心臓の鼓動が早くなるような、一種特別の刺激を感じ出した。

私はそれに調子を合わせるためには、どうしても野の中を彼方、此方と駆け回らなければならなかった。耳の側では、風がひゅうひゅうとうなっていた。

やがて幅の一步も無い程の小川へ来たので、私はそれと平行しつつ歩きだした。不思議にその小川の水を見ると、私の心はもう静まって私の脚は直ぐに駆けることをよしたのである。

私はのそのそと歩こうとも思った。また、ある時は、もっとずんずん早く歩こうとも思った。だがそうする時には私の心は何時も不安になった。そして、水の流れを見つめている私の眼は、私の歩調の標準であった。私はその標準に随はねばならなかった。

私の眼には、もうその水が流れているのか、滞っているのかも区別出来

ないようになってしまった。

同時に私は、私自身が歩いているのか、止まっているのかも、分からなくなってしまう。

ただただ私の心がこの上もなく落ち着いていることは事実だった。

私はその瞬間にまた、世界中の物、私の心と言わず、水と言わず、空と言わず、畑と言わず、それら、すべてが或るただ一つの方向へ流れているのははっきりと感じた。

その流れの源は、ただ一つであったが、私は何としてもその源を指すことは出来なかった。

また、その流れは、眼にも見えず、耳にも聞こえず、それなのにただ何とも知らず、はっきりと私には意識せられていた。

その時に私の頭脳には、ふと手にした詩集の中の一鎖りが、浮かんで来た。

今や、黄金の喜びの季節なり  
今や、愛の誕生の季節なり  
神のみこころのまったき熱情  
世界の美の歓楽  
幸福の永遠の歓楽！

私はその一鎖りを何度も何度も口に出して歌った。

私の心は泣き出したいように嬉しくなった。

そして、今がその悦びの季節だと思った。愛の誕生の季節だと思った。

…………私の心は強い王様のように私のすつかりを支配して、私に色々なことを思わせ、色々なことを感じさせた。私はそれで満足した。

私はまた、詩集を開いて見た。そこには、次のような詩が載っていた。

## 海のなみ

わたしは海の浪、  
また海の泡  
また泡の風、

また風のつばさ。

わたしのたましいは、海のしおに、  
浪のおもみに、  
泡のつぶやきに、  
風のみちに。

わたしのたまものは海の深さ、  
浪のちから、  
泡のかろさ、  
風の速さ。

わたしは、ここで、本を閉じてしまいました。どうしてか、涙で、読み進むことができなかつたのです。

著者は、父の親友だったと家族から聞いたことがありました。土田麦僊の弟であるとも。それ以上を、父に聞くことはありませんでした。

——許してください！！

気づくと、わたしは、「不思議な家族」に許しを乞うていました。

わたしには、まるで、湧いてくるように、そのひとり、ひとりに許して欲しいことが、あるのです。

わたしの変わり身に、「不思議な家族」は声もだせないでいました。戸惑っているようでした。

わたしの罪 その1) それは、わたしが「不思議な家族」を本当には、信じていなかった罪です。

本当に信じていたなら、何度も、何度も、しょうこりもなく確かめる必要などあったでしょうか？ わたし自身が、それだけ、この現象を信じられなかつたのです！！

わたしの罪 その2) それは、第三者によって、それを、実証しようとしたことです。

わたしの家族の、歌を、言葉を！！ 彼らの存在そのものを！！

例え、歌や、言葉は立証できなくとも、杏リリイの亡くなった後、せみが毎年、それぞれの物語をもって訪れ、寿命のきたせみと、残ることを選択したせみが、わが家に現存している事実は、覆しようのない現実でした。

大規模修繕工事で、建物がメッシュ、シートに囲われてしまったときも、せみは命がけで訪れてくれたものです。それで、充分だったはずです。

杏リリイの生存中、我が家を訪れてくれたせみは、一匹もいなかったのですから。それは事実でした。

わたしの罪 その3) そのため、関係した人たちを、試す結果になったことです。わたしにより、母親譲りの感受性に白羽の矢をたてられた、その娘は電話で、「わたしには聞こえないと思う！！」と何度も呟いていた事実が、突然過去から首をだしました。

わたしはそれを意識さえしていなかったのです。彼女は、自分で決まる決定的な瞬間を、回避したかったに違いありません。

それをしなかったのは、彼女の優しさなのだと。

許しをこわなければならない人が、殖えていきます！！

「不思議な家族」は、わがままいっぱい、わたしが許しをこうのを、宥めるように、何とも言い難い、優しさで包んでくれていました。

そこで、気を好くしたわたしは、言ってしまいます！！

——わたしは、もう一度、生まれてくるとしても、自由を！！ 飛びっきりの自由人として、わたしの家族を選ぶわ！！「不思議な家族」を選ぶのよ！！ 自由人の種子が、反骨の種子が、染色体のくさびの上に乗っかって、バトンタッチされているのよ！！ みんなも、それが、気に入っていることくらい、わたしにだって、わかっていたわ。だからこそ、今、わたしの家族が、ここに在るのだと。それこそが誇りなのだ！！

わたしは周囲を見回しました。

——こんな途方もないと、思える毎日が、わたしにとって、どんなに、ぱっと明るく、心躍るものか。わたしの、たまものは、たましいの響き！！ あなた方に、わかって？ 口笛を吹きたいくらいよ！！

わたしに向かって、敵意が走って来るのが、わかりました。  
それも、一人や、二人でないことが！！

わたしはパニックをおこしていました。

——何故です？ 何故わたしが、嘘をついていると、途方もない、嘘をついていると、断定なさるのですか？ わたしが、わたしの家族の、たましいとあることが、そんなにも、おかしいことなのでしょうか？

——冷静にやり過ぎすんだ、誰も呼ぶんじゃない！！  
父の声がしました。

——大丈夫、みんなが、ついているから……。  
「不思議な家族」が、わたしを護るように身動きしました。

父は、緒言に、次のように書いていました。  
大戦前の混沌の時代です。

……全半生を、この事業に捧げ、あらゆる困難あらゆる迫害あらゆる宿命と死線を超えて戦ったが、遂に悪戦苦闘、酬いられず、打ちひしがれ叩きのめされ、心の痛手に夢も園かならざる浪人生活茲に幾星霜、光なき空虚な、無意味な、而も焦燥の日は続いた。

陰惨な、朗らかならざる黒い運命の手は今だに動いている。

自分は自分を深く見つめると同時に眼を外に向けた。そして悩みは独り自分のみではなく、他人の上にも、社会にも、国家の上にも、同様に時代の悩みとも言うべき形に於いて、付き纏い襲いかかっているように思われた。

それで、この暗がりに光を得たい、生き行く信念を、戦う勇気を、絶望の勇気、孤独の猛心、そんなものでも救われるべき、救うべき真の道を得たいとは、心からなる願い、真心からの祈りであった……と。

あの時代にあって、曰く「性格主義の哲学」！！「自分の性格は自分だけの恵まれた、自分だけの祝福された砕かれざる宝石だ」と、畏友、土田杏村がその著のなかで述懐していると書いていました。

父にあっても、あの時代におもねざるを得なかったのでしょうから。  
本文を見る気にはなれませんでした。そのために流した血を、涙を、その傷みを共有する家族が、わたしを護ろうとしていました。

昭和19年6月、市の慰霊祭で、海軍中尉の兄の遺族として、謝辞を述べる父の声が広い会場を叩いていました。父は、「……起たんが為に倒れ、勝たんが為に敗れ、醒めんがために眠りたりき！！」と結びました。  
敗戦は、もう、すぐそこに迫っていました。

ブラウニングの詩です。わたしの父は、兄は、母は、姉は、父の願いのように、醒めんがために眠ったのだと、そう信じられます。

わたしの家族は、今、目覚め、わたしと生活を共にしています。歌を歌い、テレビを見、パソコンで、創作をし、シューベルトの子守歌を聞きながら眠りにつきます！！

これこそが、まぎれもない現実なのです。

しかも、それは、わたしがどのように想像力を駆使したとしても、考え及ばない、追いつけない、驚きに、おかしさに満ちていました。

生と死の月、今、たましいの季節！！

——ティアララン、ティアララン、ティアラララララ、ティアララ。  
わたしは歌いました。

——ティアララララララ、ティアララ、  
と、「不思議な家族」は、それを引き取って、何度でも歌います。

モーツァルトのピアノソナタ、第11番 第3楽章、イ長調。

子供の頃に刷り込まれた楽譜は、音楽を歌い、「不思議な家族」は嬉しくて嬉しくて、もう、たまらなくなつて、幸福そうに踊りに踊っていました。空の青も、海の蒼も、木の葉の緑も、落ち葉の赤も、幸福そうに、光っていました、輝いています。

——目に見えないからといって、何もないと思うのは単純すぎるわ。  
人間の本质である、心は、魂は、こうして、生き続けているのよ。自由に、世界を、宇宙を、飛び回ることが出来る！！

それは、生まれたものの、死んだものの、死ななかったものの、可能性なのでしょうか？

今迄だって、人間を代表してきたのは、頭でも、心臓でもなく、心だったのですから！！

——そう、はじめは、ゆっくりでいい。そして、飛ぶんだ！！ 思い切り、羽を拡げて！！

「不思議な家族」の聲がしました。そこに、わたしは、わたしを支えようとする何本もの手を見ました。

命は、夢ではないのですから？  
なら、死は、夢でしょうか？

生と死の月 12月 わが家のリビングの窓へ、あの、銀色の花道を通して、冬の太陽が訪れました！！

わたしは、驚愕し、太陽が不在になった、蒼い蒼い冬空を見上げました。

そこには、線描きでもしたような、無数の記号が、光って、光って、光りまくっていました。

たましいの構造が、解明されたのでしょうか？？

テレビでは、言葉を持たない、音で、音楽で、思いを伝え、愛を育み、怒りを収め、自然を讃えて、生きているという種族の、「せみ」の合唱が、つづいていました。

民族衣装につつまれた彼ら、彼女らの、かすかに開けた唇から、せみの声が、ビートを刻んで、拡がっていきます。

気づくと、「不思議な家族」も、わたしも、彼らのバックコーラスに乗って、「心の歌」を、声を限りに歌っていました。

完